

Title	対格, 補語, 他動性 : 印欧語史からロシア語史へ
Author(s)	石田, 修一
Citation	大阪外国語大学論集. 31 p.75-p.114
Issue Date	2005-03-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79949">https://hdl.handle.net/11094/79949</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 対格, 補語, 他動性 —印欧語史からロシア語史へ—

石 田 修 一

Аккузатив, объект и транзитивность  
(Из истории индоевропейского языка в историю русского языка)

ИСИДА, Сюити

Настоящая публикация представляет собой предварительный план «Исторического синтаксиса русского языка» на японском языке, как продолжение моей прежней работы «Историческая грамматика русского языка», вышедшей в издательстве Адзума-Шобо в 1996 году.

Историки русского языка давно замечали, что в процессе синтаксического развития русского языка постепенно расширялось употребление косвенных дополнений в различных падежах, в большинстве случаев с предлогами, путем вытеснения ими прямых дополнений. Однако с точки зрения схемы развития индоевропейского языка, выясненной контенсивной типологией, достоверность подобного мнения весьма сомнительна. Например, в исследованиях языка «Илиады» Гомера А.В.Десницкая, индоевропеист, которая играла замечательную роль с 30-40-ых годов до начала 90-ых годов, обнаружила большую широту функций и значений этого падежа в древнегреческом языке, и указала общий путь развития этого падежа из функции обстоятельственно-определятельного характера через общую объектную в функцию прямого дополнения. Тем самым она подтвердила отсутствие там грани между переходностью и непереходностью. Кстати, в истории ряда индоевропейских языков наблюдается даже тенденция превратить ВП во всеобщий объектный падеж.

Что касается категорий винительного падежа, дополнения и переходности в истории русского языка, то В.Б.Крысько, вслед за работами А.В.Попова, А.В.Десницкой, Т.В.Гамкрелидзе, Вяч.Вс.Иванова и др., пишет о текучести функции и значений ВП и о незавершенности и неопределенности переходности.

В этой работе мы попробовали обобщающе описать семантико-морфологическое происхождение падежей, в частности протоаккузатива, представить структурную схему предложений в праиндоевропейском языке как языке активного строя и наметить пути их развития до эпохи современного русского языка.

## 序

マールの試みの失敗にも拘らず、マール没後の30—40年代のソヴィエト言語学はなお史的唯物論を大きな指針として掲げつつ「新言語学」(новое учение о языке)を模索してきたが、当時マール記念「言語と思考研究所」ではメシチャニーノフを議長として研究所に集う世代を超えた使命感に燃えた学者群の間で「新言語学」に関連して「インテンシヴな」議論が展開されて来たことは、当時若くしてこの研究所で活動し、重要な諸業績を遺した女性印欧学者デスニツカヤが証言している<sup>1)</sup>。当時の問題意識はクリモフ等ソヴィエト第二世代に引き継がれ、メシチャニーノフの段階的類型論あるいはそれと一体である創生過程同一説は今日の内容類型学(контенсивная типология)の基となった。クリモフは、人類史における言語の構造化過程は、諸言語の差異を超えて、主体・客体関係に定立する程度の増大過程として捉えられること、すなわち類型型→活格型→能格型→主格型の太い流れを基調とする進化過程として捉えられることを実証的に提示している。人類史における言語の構造化過程が同一の方向性をもつ、という構想(創生過程同一説)は、ソヴィエト言語学がマール以来根強く抱いてきたところである。その意味で、内容類型学は、明らかに、ソヴィエト言語学が源流において持っていた問題意識とパトスを基礎として結実したものである。ただし、マールは史的唯物論という哲学的演繹の側からのみ当該説の証明に性急であるという欠陥を持ち、それを克服するには大きな時間の流れと多数の言語学者の諸言語記述の活動、なかんずくクリモフ等を中心とする学者群の活動を俟たねければならなかったのである。尤も、創生過程同一説を持っていたのはソヴィエト言語学だけではない。自然、社会、人間という全体世界の連続の中で言語を捉えようとするソヴィエト期の言語学者とは異なって、アメリカ人サピアは全体世界の連続をヘーゲル的な哲学的演繹によって捉える姿勢とは無縁であったろうが、自らの実証的言語研究から帰納した結果に対しては実直であったから、クリモフもサピアの姿勢を支持している。すなわちサピアはその著「言語」に次のように書いた:「世界の異なる諸地域隔々で相異なる歴史的来歴から、類似の社会的、経済的、また宗教的な制度が出来上がってきたのと同じように、言語もまた相異なる道を通りながら類似の形に合一しようとする傾向を見せて来ている。しかも、言語の歴史的研究が確実に我々に証明したことは、言語は連続的に変化していくだけではなく、それは一つの型から別の型へと無意識の内に動いていくこと、またその動きが類似の方向性を持つことは、地球上の遠く隔たった隅々にまで観察される。これはつまり、同系関係を持たない諸言語が、絶えずそれぞれ独自に、概ね類似の形態組織に収斂していく、ということになる。したがって、比較可能な類型の存在を認めるとき、我々は決して個々の歴史的過程の独自性を否定しているのではない;我々はただ、歴史の外面的な動きの背後には、他の社会生活が作り出すと同様、言語を一定のモデルへ、言い換えれば、類型へ方向付ける強力な駆流(drift)が働いている、と主張しているにすぎない」<sup>2)</sup>。実証研究の帰結としてのサピアの発言には重みがあり、これは「新言語学」潮流の綱領的主張を補強するのである。

後述するように、クリモフは現存活格諸言語の構造の研究を通して、それらに最もよく

当て嵌まるいくつかの祖語（カルトゥベリ語、印欧語等の古層）の諸現象にも言及しているが、これに相呼応して、ホメーロスの言語等の研究を通して印欧語能格説を否定し、印欧語活格説を熱く論証して見せたのが上のデスニツカヤ、さらにタマス・ガムクレリゼ、ヴァチェスラフ・イヴァノフ、ユーリー・ステパーノフ等のソヴィエト期を生きたロシアの学者群である。こうしてこの分野の研究のプライオリティーは、明らかに、ソヴィエト期のロシアの言語学者群が握っているが、この研究動向が近年すでに欧米にも広がりつつあることは、すでに大部なガムクレリゼとイヴァノフの共著「印欧語と印欧人」（1984；1328pp）の英訳（1995）等が現れていることから窺い知ることができよう<sup>3</sup>。

さて、ロシア語史は、当然のことながら、印欧語の深い過去の発達過程を引きずっており、ロシア語史の諸現象の多く、とりわけ表題の範疇は、本来印欧語との連続で然るべく記述されて初めて説明力をもつ。そこで、本稿は、筆者が書いた前作「ロシア語歴史文法」<sup>4</sup>の続編たるロシア語統語法史試案の一部として、近年の内容類型学の成果を基に提出されている印欧語構想に最も深く関わるロシア語史の核心の問題（対格と補語と他動性のメカニズムとダイナミズム）を印欧語構想との連続線上で記述することを試みたものである。直接補語（直接目的語）格としての対格、またそれと一体である他動性は歴史的な範疇であり、そこには諸言語の差異を越えて同一の方向に収斂する傾向を窺うことができるのである。

## 1. 内容類型学が明らかにした印欧語構想

ウーレンベク（ユーレンベク）は1901年、論文「印欧語の格組織における Agens と Patiens」において、印欧語の古層には能動格と受動格という僅か二つの格形式が存在したにすぎない、そして能動格とは「他動詞における主体の格と解すべきもの」で、その形態指標は -s であって、これは指示代名詞の語基 \*s-o (> 古代インド sa, ギリシャ ὁ, ゴート sa 「これ」) に起源を持ち、これを接尾辞化して後置冠詞的に名詞に付加してそれを表徴したのに対して、受動格は「行為を被る人または行為を受ける物の格」であり、「もっと一般的な意味では、ある事が（それについて）述べられる人または物の格」である、したがって、「受動格には何ら他動的な行為は帰属されず、したがって他動詞の客体の格、受動動詞および自動詞における主体の格」であり、その受動格の形態はゼロ語尾、つまり「純粹語基であり、-o 語基の場合だけは -m 語尾の表徴を持つ」、と書いた (cf. ラ 単数主格 lupu-s, ギ λύκο-ς, 古イ vřka-s, 単数対格 lupu-m, λύκο-ν, vřka-m, 中性単数主・対格 古イ yugá-m, ギ ζυγό-ν, ラ jugu-m, ヒッタイト iuka-n, 古ス иго; 周知のように、スラヴは開音節法則に従って -s, -m の語尾は消失している：主, 対格 \*ul̥k<sup>[h]o</sup>-os, \*ul̥k<sup>[h]o</sup>-om > 古ス влъкъ > вълкъ > 古ロ вълкъ > 罗 волк) <sup>5</sup>。さらに、ウーレンベクは、能動格が男性、女性名詞には発達したが、概して無生物を指示する中性名詞には発達しなかった、例えば印欧人にあって樹木は有生ないしは能動的なものに見なせるが、その果実は受動的なものだから s 語尾の能動格は発達しなかった、点にも言及している。印欧語の主格と対格として文証される形の起源が能動格と受動格である、とするウーレンベク説は、印欧語の名詞の三性（男性、女性、

中性) 区分は有生類, 無生類の二項対立に遡るとするメイエの定式化 (1921 年「歴史言語学と一般言語学」) を経, それはさらにアナトリア言語学の発達によってヒッタイト語の事実 (男, 女性を含む共通性と中性の二項対立) に補強され, 名詞の類別と文法格の組織との内的論理的関係が次第に明らかになり, 今日内容類型学が印欧語に想定する名詞の活性類, 不活性類の類別と活格, 不活格の格構想に繋がっていくのである。

ウーレンベクやメイエ (20 世紀) に先立つこと 20 – 30 年も前 (19 世紀末) に, 印欧語の格組織の発達を広い視野で観察していた夭折 (24 歳) のスラヴ学者ポポフがいたことも付言しておかねばなるまい<sup>6</sup>。ポポフの「統語研究」は, 「サンスクリット, ゼンド, ギリシャ, ラテン, ドイツ, リトアニア, ラトビア, スラヴ語における相の意義と無人称文の発達史に関連した主格, 呼格, 対格」という副題を持つが, 構想の主眼は印欧語対格史の再構であった<sup>7</sup>。当該研究のポイントを挙げるとすれば, 先ず第一に, ポポフは, クルチウスの印欧語の格の二段階位相説 (主, 呼, 対格形成の第一段階とそれ以外の格形成の第二段階という構想) を批判的に継承し, 第一段階での主格, 呼格, 対格の発生の相対年代順とその原点でこれら諸格の関係を闡明化しようとしたことである。その中で, 印欧祖語の原点たる最古期に, 意味的・文法的機能が未だ定まり切らない無形態語基たる純粹原基, いわゆる不定格 (casus indefinitus) の存在を想定し, その状態を原点にして, それを先ず -m マーカーで, 次に -s マーカーで拡張していった (-m, -s による拡張の順序そのものについてはこれの逆順の可能性も想定していたが, 若きポポフはクルチウス構想を取りあえず継承した, という) とする構想に立った上で, これらマーカー (表徴) の機能の最古の差異は意味的なものである, と主張したのである: 「s 格は行為を行う主たる事物, 主体指標となる; m 格は何かそれと対立するもの, ちなみに受動的な事物, 状態を表したに違いない。両形態素は当初は語派生的な意義を有していた: s 要素は恐らく行為者名詞 (nomina agentis) の形成用であり, 一方 m 要素は主格にも対格にも何か二次的, 従属的な事物の名称用として使われたのである。m 接尾辞の語派生的性格は, 従属的, 受動的事物を表すこの形が, その物を行為者として表象する必要がある場合に保持されるという点にはっきりと現れている。中性主格の意義でのこうした m 格の使用の, 語派生的意義の古体的残滓から, この意義を対格の意義の歴史的発展での要の位置に据えることができる」<sup>8</sup>。

### [名詞. 語彙と形態]

以上の諸問題 (不定格 casus indefinitus; -m, -s マーカーの原初的意義と主, 対格の形成過程; 印欧語原初対格の機能等の問題等) に関する現代の結論を概観しておく。

印欧語において単数主格形の形態素として再構される \*-s, \*-os (この場合テーマ母音 -o + s) に対して, 単数対格形の形態素として再構される \*-m, \*-om (ul̥k<sup>[h]o</sup>-os [狼] > 古イ vřkas, ギ λύκος, ラ lupus, リト vīl̥kas, 古ス vlīkū [влькѹ], ゴ wulfs に対する ul̥k<sup>[h]o</sup>-om > vřkam, λύκον, lupum, vīl̥ka, vlīkū [влькѹ] 等々多数の例) とそれと形態的に一致する中性主, 対格形の形態素 \*-om (\*iuk'-om [軛, 絆] > 古イ yugám, ギ ζυγόν, ラ jugum, ヒッタイト iukan, 古ス iḡo [иго] 等) の対立は, 有生類名詞 (後の男性, 女性名詞, cf. ヒッタイト語「共通性」

名詞)を表徴する \*s, \*-os マーカーと無生類(後の中性名詞, cf. ヒッタイト語「中性」名詞)に属する指示物を表徴する \*-m, \*-om マーカーの対立であること, つまり, 実は原初的には文法的対立(主体格=主格と客対格=対格の対立)ではなく意味的対立であることは, すでに今日では一般的に認定された結論であろう。ガムクレリゼ, イヴァノフの「印欧語と印欧人」も, この点に関して次のように述べている:「これら二類名詞の意味的対立は, 全く明白である。\*s, \*-os 語尾は, 無生類に属する事物を表す \*-om 接尾辞の名詞に対して, 有生類に属する(有生類的と観念される事物を表す名詞を含めて)名詞形を形成するものであることは, 完全な根拠をもって確認することができる。『有生』類名詞とは, 本来的に活性的な(active)名詞類, すなわち活性的な活動能力がある(あるいは活性的と観念される)事物を表す名詞類であり, 活性的活動能力を持たない事物を表す名詞をひっくるめた『無生』類名詞と区別される。この意味特徴面で互いに対立する名詞のこうした二類別は, これら名詞が表す指示物の活性-不活性による類別として特徴づけることができる。この場合, \*s, \*-os および \*-om 接尾辞が形成する印欧語の名詞形成は, 具体的な名詞を二項類の一方である活性類あるいは不活性類に相関させるための接尾辞-マーカーを介して形成される形と見なすことができる。接尾辞 \*s, \*-os は活性類名詞の派生用マーカーであり, 接尾辞 \*-om は不活性類名詞の派生用マーカーである」<sup>9</sup>。なお, 「印欧語と印欧人」によれば, 不活性類マーカーとしては, \*-om 以外に, \*-t, \*-t<sup>[h]</sup>, \*-k<sup>[h]</sup>, Ø も見られる<sup>10</sup>。

活格言語内の発達段階位相によって多少の異同はあるが, 活性類と不活性類の名詞分類の基礎にあるのは, 「現実の指示対象が生命的活力 vital activity や生命環 life cycle を持つか持たないかという特徴面での差異」であり, 例えば典型的な活格構造言語ハイダ語(北米原住民ナ・デネ大語族の一)では, 人間, 動物, 樹木, 植物が活性類であり, その他残余の名詞類(鳥, 海, 岩, 毛皮, 家, 鼻等々)は不活性類に属する<sup>11</sup>。例えば印欧語では, 樹木を表す名詞は活性類であり(ラ *pirus* 梨の木, *mālus* りんごの木), その樹木の果実は不活性類と観念されている(ラ *pirum* 梨, *mālum* りんご)。ただし, こうした自然的分類の活性類以外にも, 動的人体部分たる, 手, 足, 眼, 歯等の名詞とか, 自然現象, 抽象的概念に属する, 風, 雷, 稲光, 水, 川, 秋, 運命, 天命, 幸福等も, その言語の担い手から見て本来活性的活動能力, 本質を付与されたものと観念して活性類に入れることもある。その点で興味深い事実として, 上の「印欧語と印欧人」は, 水や火を活性と不活性で区別する印欧語の痕跡例を示している(活性類 \*Hap<sup>[h]</sup>「水, 川」> 古イ *ápas*, ヒ *hap* 等に対する不活性類 \*uot<sup>[h]</sup>ort<sup>[h]</sup>「水」> ヒ *uatar*, ギ *ῥῥωρ*, 古英 *wæter* 等)<sup>12</sup>。この点に関して, 名詞の「相関性の基にある対立を, 用語上『有生』と『無生』という二項式によって認定することに, 幾分かの不正確さがあることは明らか」であり, 活格言語の名詞区分が「社会的に活性的な指示対象と社会的に不活性な指示対象の対立特徴へ向けて次第に再編されて来る, またその対立が事物の名称の一部の, 不活性類から活性類への転換を伴う, という歴史的傾向を示している」, とするクリモフの発言を付け加えておこう<sup>13</sup>。クリモフによれば, 現存活格言語内には三つの段階位相(初期型, 基準型, 後期型)が観察され, 初期段階のナ・デネ諸語では概して有生原理と無生原理が優勢であり, 基準型(トゥピ・ワラニー諸語)

では活性・不活性原理が, 後期型(イロクォイ語)では主体・客体原理の比重が高まる, という<sup>14</sup>。活格言語初期型は, 活格言語の前段階とされる類別型言語の後期型(名詞, 動詞の多類別原理を有生・無生原理に再編する傾向があるとされる)に近いのである。クリモフは, これら一連の事実集合も含めて, 「マルクスの有名なことばを敷衍して, 言語の面でも, 古代ギリシャ人の背後にはまぎれもなくイロクォイ人が姿を見せけている, ことを証する別の根拠も少なからず存在する」, と述べたのである<sup>15</sup>。

なお, ガムクレリゼ等は, 「構造・統語的不活性」について述べている。本来的な第一次的な自然な類別に基づいて付加される類別マーカーとしての不活性類指標 *\*-m*, *\*-om* に起源を持ちながらも, 歴史的にはやがて, 統語法上の必要性から, 第一次的類別マーカーとは区別される構造・統語的な不活格指標としての *\*-m*, *\*-om* が発達してくる, というのである。すなわち, 二つの行為項(Aktant)を含意する二価動詞(二項動詞)の場合, 例えば動詞「殺す」の場合—「人・殺した・獣」—, これら行為項(人, 獣)は何れも本来的には活性類(*\*-s*, *\*-os* 類)に属するが, その何れかは行為主体(Agens 行為主), 行為客体(Patiens 被行為主)となるはずであるから, Patiens となる Aktant は構造・統語法的には *\*-m*, *\*-om* の標識を取ることになる。例えば, 「人が・獣を・殺した」では, 本来は活性類たる「獣」が *\*-m*, *\*-om* 指標で現れることになる。ガムクレリゼ等は, このことを傍証するために, 印欧語の同一語根から形成される意味の異なる活性類と不活性類の派生例を挙げている: *\*p<sup>[h]</sup>et'-s*「足」(活性類) > ラ *pēs* (対格 *pedem*), ギ *ποὺς* (対格 *πόδα*) に対する *\*p<sup>[h]</sup>et'-om*「足跡, 足場, 土地」(不活性類) > ギ *πέδον*「大地, 土地, 地面」; *\*juk'-s*「繋がれた」(> ラ *conjūnx*「夫, 妻, 夫婦[pɪ]」) に対する *\*juk'-om*「くびき」 > ラ *jugum* (cf. *ιγρο*) 等。ここから構造・統語的不活性形まではあと一歩だという訳だろう。「特徴的な不活性マーカーを付けたこのような不活性形は, 恒常的に不活性マーカーを付す, 語彙的に指示された第一次的な不活性とは異なって, 構造・統語的不活性と解することができる。こうした構造・統語的不活性の使用は, 格形式, とりわけ主格形 *\*-s*, *\*-os* に対する対格形の生成の萌芽と見なすことができる。以前から印欧語比較文法が指摘してきた, 対格形と中性名詞主・対格形の一致もこのことによって説明すべきである。こうして, 印欧語名詞組織の発展の最古段階に対しては, 名詞の活性類—不活性類という二項分類と, それに続いて起る, 形態素 *\*-s*//*\*-os* による活格と形態素 *\*-m*//*\*-om*,  $\emptyset$  による不活格の形成を再構することができる。この場合, 不活格は一価動詞形においても二価動詞形においても, また恐らく *давать* (‘‘が・に・を与える’'), *называть* (‘‘が・を・と呼ぶ’') 等の三価動詞形においても不活性行為項を表す」<sup>16</sup>。こうして, 意味的類別指標であった活性類のマーカー *\*-s*, *\*-os*, 不活性類のマーカー *\*-m*, *\*-om* およびゼロ( $\emptyset$ )は, それぞれ活格マーカー, 不活格マーカーという文法格に再編されていくというのである。ただし, 後述するように, ユーリー・ステパーノフは, 構造・統語的不活性の設定には懐疑的である<sup>17</sup>。

ところで, これらの二種類のマーカー (*\*-os*, *\*-om*) は印欧語主格語尾として現れる以外に, 単数, 複数の別なく属格の語尾としても現れることでも知られている (cf. ラ *pēs*「足」 > 単・属 *pedis*, ギ *ποὺς*「足」 > 単・属 *ποδός*, ヒ *uddar*「語」 > 単・複・属 *ud-dan-aš*; ラ

複・属 *ped-um* < \**ped-ōm*, ヒ *antuḥšaš* 「人」 > 単・属 *antuḥš-an*, 古ス 複・属 *матеръ*, cf. ラ *matrum* 等)。単, 複数の別なく再構される印欧語最古のこれら二系列指標はヒッタイト語に最もよく反映しており, \**-an* はいわゆる共通性のみ, \**-aš* は中性にも共通性にも現れることから, ガムクレリゼ, イヴァノフは, 「歴史的なヒッタイト語でのこれら形態素のこうした分布は, 恐らく, これら形態素が原初には一定の文法類の名詞と関連していたことを反映したものである: *-an* は共通性, すなわち有生類名詞に相關するのに対して, *-aš* は恐らく専ら中性名詞, すなわち無生類名詞に相關するものであったろう。…ヒッタイト語の属格語尾に残滓的に現れる *-aš*, *-an* の意味は, \**-os*, \**-om* のような形態的二重性が異なる意味機能の特徴をもっていた最古の共通印欧語の状態を反映したものである。古代ヒッタイト語の資料から判断して, \**-os* 語尾は無生類名詞の (単数, 複数) 属格形態素として, それと区別される \**-om* 語尾は有生類名詞の (単数, 複数) 属格形態素として再建すべきである。正にこの点からして, 名詞の有生～無生特徴による対立 (類別) による形態範疇 (とりわけ属格関係) の表現の形式的峻別は最古の印欧語の状態と見なすことができる」、としている<sup>18</sup>。

してみれば, 有生類 (活性類) と無生類 (不活性類) にそれぞれ固有であった類別マーカー \**-os*, \**-om* が, 属格では逆に (有生類 \**-om*, 無生類 \**-os* として) 現れていることになる。これは何故か。このことを, ガムクレリゼ, イヴァノフらは限定句における定語と被定語の語結合関係のあり方 (定語あるいは被定語に立つ活性, 不活性類名詞の組み合わせのあり方) から説明している<sup>19</sup>。すなわち, 定語, 被定語の類別の異同による組み合わせは,

- ① 被定語 (活性類-*os*) – 定語 (活性類-*os*)
- ② 被定語 (活性類-*os*) – 定語 (不活性類-*om*)
- ③ 被定語 (不活性類-*om*) – 定語 (不活性類-*om*)
- ④ 被定語 (不活性類-*om*) – 定語 (活性類-*os*)

の四つのケースが考えられるが, ①, ③のように被定語, 定語共に同類別名詞である場合には単なる同類別語の並列 (parataxis) による同格限定語を形成するから, 活性類同士の並列ならば \**-os*, 不活性類同士の並列ならば \**-om* になるが<sup>20</sup>, ②, ④のように被定語と定語の類別が異なる場合, 定語 (属格) の類別マーカーを決するのは被定語の類別であり, したがって, ②の定語 (属格) マーカーは \**-os*, ④の定語 (属格) マーカーは \**-om* となる。要するに, 定語のマーカーは被定語のマーカーに一致させるのである。

このことは, 属格定語のマーカーが主格の場合のマーカーと逆になることを説明すると同時に, 形容詞定語の語尾が被定語のそれに一致呼応する現象 (形容詞形の形成) も説明することになる。例えば ヒッタイト語形容詞の共通性語尾 *-[a]š*, 中性語尾 *-an/-ø* により, *neḥaš* 「新しい」 (новый, новая), *neḥan* (новое); *aššuš* 「良い」 (хороший, хорошая), *aššu* (хорошее) 等。三項 (男性, 女性, 中性) 区分ではなく, こうした二項区分 (活性 > 男, 女性と不活性 > 中性) による被定語との一致呼応は, ギリシャ語やラテン語にも残滓的に見られる: ラ *fortis*, *forte* 「強い」, ギ *πάτριος*, *πατριον* 「父の」等<sup>21</sup>。



また、属格定語 \**-om* の起源と発展のこうした解釈から、上述の構造・統語的不活性の位置に登場して後に不活格から対格へと再編されていく場合の対格語尾 \**-om* とこの属格語尾 \**-om* の同源の来歴も説明することができる。このことはまた、スラヴ語における名詞、代名詞（特に *o* 語幹名詞、1, 2 人称代名詞、疑問代名詞）の活動体対格＝生格の現象の起源も含めて、いくつかの印欧語に現れる属・対格の一致という類似の統語現象をよく説明することにもなる。

こうして \**s*, \**m* の要素は、主格、属格、対格を繋ぐ連鎖環を成すことになるが、対格の生成過程に関してステパーノフは、ガムクレリゼ、イヴァノフとは幾分ニュアンスの異なる見解を採っている。ステパーノフは、「我々の観点は、ガムクレリゼ、イヴァノフの観点と細部一点だけで異なる。彼等は、属格指標（すなわち原点は被（限）定語＋（限）定語シンタグマ全体の指標）が、①不活性マーカー \**-om*、②構造・統語的不活性（すなわち位置的不活性行為項）指標 \**om* と一致すると考えているが、我々の考えでは、属格指標 \**om*<sub>1</sub>（これは限定的シンタグマの指標）と不活性類マーカー \**om*<sub>2</sub> が一致したことが対格の形成そのものである。この一致こそが、新しい第三の指標 *om*<sub>3</sub>－構造・統語的不活性の、すなわち対格の指標（我々の用語法では『対格-1』）を形成する。属格 \**om* の指標と機能が語彙的不活性類マーカー \**om* の指標と機能に一致した結果である」と主張している<sup>22</sup>。これはつまり、この指標 \**om* は述語的シンタグマにおいても限定語的シンタグマにおいても、述語ないしは被定語に対して機能範囲の広い状況・限定的な説明を与える形式の萌芽である、という主張であり、原初属格と原初対格に共通する「限定格 (Bestimmungskasus)」<sup>23</sup> 的な性格を \**om* 指標に窺うことができるということである。

原初対格の性格が現代欧米語等の純客体対格、とりわけ直接補語機能ではなく、斜格一般形的な、状況・限定的な機能であったという点については、ホメーロスの「イーリアス」における対格の研究を基礎にしたデスニツカヤの諸論文が的確に総括している。印欧語対格の「原点は名詞の二項分類の存在であるが、古代的意识が、万物万象をその有義性的観点から行った、またそれを表す名詞が文において主体機能あるいは客体機能で登場し得る特性を備えているか否かという観点から行った、質的判断に基づいたものである。このことは、潜在的な『主体』類（一般的用語では『有生』類）に固着した主体専用形態素 *-s* を創り出した点に現れている。一方、『客体』類であれ、また恐らくは『主体』類であれ、（そのどちらもが）非主体機能のときに登場したのが無形態原基である。ただし、この段階でこの形の『客体的』意義を云々するのはまだ早計である。述語に与えられている特徴の限定的要素機能で登場してくる無形態原基が不可分一体的な述語複合体の中から次第に脱しつつ、時を経て初めて文の二次成分に変換され、補語となっていくのである。長期にわたって、無形態原基の、つまり『不定格』の支配的意義は、状況・限定的な性格の意義であって、客体的性格の意義ではない。このことは、古代印欧諸語の対格が相当広い状況語的機能を具有していることに残滓的に現れている。『無生』類語幹 (*o* 語幹) タイプの一つには *m* 形態素が固着している。これの原初的性格が如何にあれ、つまり最新の比較言語学が考えているように何の意味も表さない音声学的な付加要素であれ、あるいは代名詞的な

起源を有するものであれ、これが、①無形態原基、すなわち『不定格』に対する二次的な付加要素であること、②『客体』類(『無生』類)の一定の名詞類に繋がれること、だけは明らかである。この形態素が代名詞起源であったとすれば、それが述語の限定語機能で登場する名詞の、また恐らくはすでに文の自立的成分としての補語の機能で登場する名詞の、『限定性』指標の機能を獲得した可能性が極めて高いのである<sup>24</sup>。

### 〔動詞、語彙と形態〕

さて、それでは、動詞の状態は如何なるものであったか。クリモフが現存活格言語における名詞の語彙化原理が活性類と不活性類の二項区分であるとする結論を得ていることはすでに上に述べたが、動詞についても、この名詞の類別に誘導され、呼応した語彙化原理が行われている。すなわち、基準的な活格言語では、「行為の活性－不活性の基準による」活格動詞(行為動詞)と不活格動詞(状態動詞)の別が行われている。したがって、活格動詞は、活性類の指示対象が行う行為、運動、出来事を表す動詞であり、例えば、「産む、生まれる」、「育つ、育てる」、「死ぬ」、「行く(歩行する)」、「走る(走行する)」、「落ちる、倒れる」、「泣く」、「話す」、等々であること、その際他動性－自動性は構造的に関与的な特徴でないから、「殺す－死ぬ」、「燃える－燃やす」、「歩行する－携行する」、「駆ける－駆り立てる」等の意味の合一した動詞が機能しているという。また不活格動詞(状態動詞)は、「不活性類の指示対象と相関する状態、性質ないしは特質を表す」動詞、特に「不活性類の指示物に相関する物理的状态の動詞」の比重が高く、例えば、「掛かる、ぶら下がっている」、「転がっている」、「突き出ている」、「(風が)吹く」等の他、そこには、主格構造言語の形容詞述語に相当する、「高い、長い」、「大きい」、「尖っている」、「黒い」、「湿っている」等の動詞が入っている。以上は活格言語における原則であるが、初期の活格言語では、「それは度々有生行為と無生行為の対立観に近い」弁別であったり、また反対に、後期活格言語に移行するに伴って、活性類名詞－活格動詞(行為動詞) // 不活性類名詞－不活格動詞(状態動詞)の呼応関係は崩れていく場合が見られる。したがって、状態動詞の主体に活性類名詞が登場することもあるので、これを指してアメリカの記述研究はこうした状態動詞を「中立動詞」とか「中間動詞」と呼ぶのである。「中間」「中立」動詞という規定の仕方は、共時的な断面の記述として適正を欠く訳ではなかろうが、言語構造化のダイナミックな弁証法的展開過程を捉えるには難がある、と本稿筆者は考えている<sup>25</sup>。クリモフによれば、早期の活格言語では意味的に状態動詞であるものを活格動詞として扱う比重がより高いという「一定の法則性」がある。例えば、「横たわっている」、「落ちる」がワラニー語では活格動詞であり、ダコタ語では状態動詞である。「殺す、死ぬ」の合一した語彙素がワラニー語では活格動詞、ダコタ語では「殺す」は活格動詞、「死ぬ」は状態動詞である<sup>26</sup>。これに関連していえば、実は活格言語の段階位相に応じて諸言語間に差異はあるが、活格動詞、状態動詞以外に不随意的な行為あるいは状態を分立させて構造化する活格言語がある。これを不随意行為・状態の動詞と呼び、これらは後のいわゆる情緒動詞 *verba affectuum*、感覚動詞 *verba sentiendi* 等の起源となる動詞群である(「見える」、「聞こえる」、「知っている」、

「好きだ」, 「嫌いだ」等)<sup>27</sup>。活性類名詞と不活性類名詞に誘導され, 呼応してそれぞれ活格動詞, 不活格動詞(状態動詞)が現れ, また後述するように, それに呼応して活格構文, 不活格構文が指定されるように, 不随意行為・状態動詞を区別する活格言語では不随意行為・状態の構文が指定されるのである。この第三の文類型は仮に「情緒構文(affective construction)」と呼ばれているが, 文字通りの「情緒」だけではなく, 活格言語の段階ではその機能範囲は後の能格言語や主格言語のそれに比してはるかに広い。主格構造化すなわち他動性の発達に従ってこの不随意行為・状態動詞類は歴史的には次第にその機能範囲を縮小して他動詞, 自動詞の中に飲み込まれていくのである。クリモフは, この動詞類の存在を指して, 「その意味特徴は, 活格構文や不活格構文によっては伝達し得ない思考活動の広さに起因するもの」と説明しているが<sup>28</sup>, 活格動詞, 状態動詞, 不随意行為・状態動詞間の比率は活格諸言語間に差異があり, 揺れがある。この揺れこそ主格構造化への再編に深く関わっており, 後述する印欧語 *perfectiva tantum*(絶対完了語類)と *media tantum*(絶対中動類)の語類や振る舞いは正にこの点に起因するものである, と考えられる。

ここで情緒構文の特徴についてグルジア語(カルトヴェリ諸語の一)を典型例に若干触れておきたい。まず, グルジア語は普通わが国では能格言語といわれているが, クリモフは, 「カルトヴェリ諸語は基本は主格言語でありながら, 活格構造の多くの残滓的現象を保存する言語」, と認定している点に注意が必要である<sup>29</sup>。情緒構文の特徴は, いわゆる主体・客体関係の表現に通常の構文とは異なる, 格の逆転(inversion)語法を取ることである。例えば, Mas(3人称代名詞与格) Ana(主格) u-qvar-s(3人称主体指標接辞-好きだ, 好ましい[語根]-3人称客体指標接辞)「彼はアンが好きだ(He loves Ann)」<sup>30</sup>。動詞に付加される接頭辞と接尾辞はそれぞれ mas「彼には」と Ana「アンが」に一致呼応する関数的指標(exponent)で, 動詞構造は主体指標だけでなく客体指標も組み込んでいる。グルジア語では対格が欠損し, 与格と称される格が客対格(直接, 間接)一般を表すが, 通常の構文では意味上の主体=主格//意味上の客体=与格であるのに対して, 情緒構文ではこの関係が逆転し, 主体=与格//客体=主格となる(記述文法が説明する上例の動詞構造中の接頭辞は, 本来は意味(論理)上の主体指標, 接尾辞は意味上(論理上)の客体指標の意。したがって, He loves Annの英訳は意味的, 論理的な解釈訳である)<sup>31</sup>。こうした主体と与格で表す構文の特色は, ロシア語 Ему(与格=主体) нравится(好きだ) Анна(主格=客体)にもまた日本語にも見られる<sup>32</sup>。さらにまた, ラテン語 Mihi(dat) pater(nom) colendus(gerundivum/nom)est(pres/3sg[be])「私は父を尊敬すべきだ」=ギリシャ語 ὁ πατήρ(nom) ἐμοί(dat) τιμητέος(nom) ἐστίν(pres/3sg[be])<sup>33</sup>。このようにこの種の構文では動詞述語が意味上の主体(与格)にではなく意味上の客体(主格)に一致, 呼応するため, 当該構文のもう一つの特徴として, 動詞述語の客体活用(objective conjugation)が言われる(グルジア語の場合は, 動詞構造中に主体, 客体共に一致呼応する接辞指標を措くが)。

さて, 話を元に戻すと, ガムクレリゼ, イヴァノフも, 印欧語の動詞全体を分ける二つの基本的意味類として, 活性的意味の動詞類-「歩行する」, 「駆り立てる/駆ける」, 「減ぼす/減びる」, 「食べる」, 「生きる, 住む」, 「呼吸する」, 「話す」, 「笑う」, 「殺す」, 「育

つ」等－と不活性的意味の（すなわち不活性指示対象が特徴とする行為、状態を表す）動詞類－を挙げている。ただし、ガムクレリゼ等も、「純論理的観点からして、専ら不活性類とのみ結合する意味素類は極めて限られており、それは原則として、活性類名詞と結合し得る動詞形が表すいくつかの意味素－『横たわっている』、『落ちる、倒れる』、『重い』、『小さい』、『大きい』－と一致する場合もある。このような場合には、活性－不活性の形式的対立は、名詞あるいは動詞のパラダイムにおける二系列の文法指標の存在に、また二重語彙を成す名詞形および動詞形の存在にも、表される」<sup>34</sup>、としているように、「純論理的観点から」、換言すれば、活性・不活性原理の深底に潜在していた主体・客体原理の意識の現実化に従って、印欧語における名詞類と動詞類の完全な呼応関係は崩壊の兆しを顕してくるのである。

さて、印欧語における名詞の活性類と不活性類を指示するマーカー \*s, -m (\*∅) におけると同様、動詞についても、二類の存在とその形態構造を証する指標を提示できるのだろうか。これについても、旧ソヴィエトの類型学、印欧学は（過去の多くの内外の学者達の諸研究の基礎に立って）、現段階で可能な一つの大きな概略図を提示している。例えばクリモフは、次のように書いた：「印欧祖語動詞の二つの活用インユンクティブ (injunctive) ～パーフェクト (perfect) の対立の意味は、おそらく活格構造言語の活格動詞と状態動詞の形の対立の意味内容に照らして明確化することができよう。…印欧祖語動詞の二系列の語尾、すなわち第一系列は（1 人称 \*m, 2 人称 \*s, 3 人称 \*V の接尾辞によって特徴づけられる）インユンクティブの形に相関し、第二系列が（1 人称 \*H(V), 2 人称 \*h(V), 3 人称 \*V の接尾辞からなる）パーフェクトの形に相関するものを、活格型言語における活格及び不活格の人称接辞系列、つまり第一系列が場の活性的参加者の形、第二系列が不活性的な参加者の形とされる接辞系列、と比べてみるのも、なかなか興味深いのである。両方の場合とも、単数と複数の数に対して単一の人称指標を使っていることも共通のことである」<sup>35</sup>。すなわち、\*mi 系列は活格動詞、\*Ha 系列は状態動詞に対応している。\*m (i) 系列が活性行為項に相関し、\*Ha (< \*H<sub>e</sub>) 系列が不活性行為項に相関する形であることについては、ガムクレリゼやイヴァノフも詳しく検討している。彼らの結論のいくつかを箇条書き的に挙げてみると、① \*Ha 系列の活用は、大多数の印欧語方言のパーフェクトと中動形の基礎になっており、またアナトリア諸語の -hi-/-ha- 活用の動詞構造に立証されること、② \*mi 系列語尾が動詞形中に組み込まれて、活性類名詞の行為項 (Actant) を指示する一種の指数関数的要素 (exponent) であるのに対して、この \*Ha は不活性類行為項に相関する動詞語形中の指示要素 (exponent)、つまり動詞語形中に指示される不活性行為項マーカーであること<sup>36</sup>、③ \*mi 系列パラダイムに比べて \*Ha 系列パラダイムは、最古の印欧語では欠損的で（人称対立を欠き）、3 人称だけの、すなわち In - V-e 型（以下に示す I 型文型モデル）中の、動詞述語というよりむしろ形容詞的述語類 (perfectiva が本来 tantum であった、すなわち絶対完了語類であった所以) とも解釈すべきものであったが、活性類名詞を主体 (行為主 Agens) とし、不活性類名詞を客体 (被行為項 Patiens) として組み込む二価動詞 (divalent verb, двухвалентный глагол, двухместный глагол) のモデル（以下

のⅢ型モデル)の発達に従って1, 2人称パラダイムが徐々に完成されて行った, ということになる<sup>37</sup>。

これを具体的に書けば, 次のようになる。彼らによれば, 二価動詞でも, Agens, Patiens 共に活性類であるような文(以下のⅣ型モデル)では \*mi 系列語尾(活性主体人称を代表する exponent)を付けて,

1 人称 A - V-mi - A<sup>m</sup>「私・殺す・獣」

2 人称 A - V-si - A<sup>n</sup>「君・殺す・獣」

3 人称 A - V-ti - A<sup>n</sup>「人・殺す・獣」

のように形式化されたが(A=Active; In=inactive; Ain=Active<sup>inactive</sup>=構造・統語的不活性; V=Verb), Agens が活性類, Patiens が不活性類(以下のⅢ型モデル)の場合, 動詞構造中に不活性行為項の指標を組み込んで形式化された, すなわち

1 人称 A - V-Ø-Ha - In「私・置く・石」

2 人称 A - V-t<sup>[h]</sup>-Ha - In「君・置く・石」

3 人称 A - V-e - In「人・置く・石」

である(この場合, \*Ha は不活性類行為項の関数要素 exponent, ゼロ[Ø]は活性行為項たる1人称の, t<sup>[h]</sup>は2人称指標の exponent, -e は不活性行為項を持つ一価動詞構文(以下のⅠ型モデル)に登場するのと同じ指標である)。彼らは, このパラダイムが「最も完全に残っている」のがヒッタイト語の -hi 語尾他動詞活用であり, 「アナトリア諸語, とりわけ古期ヒッタイト語の発展の歴史的時期に, -hi 他動詞活用が無生(中性)類の直接補語を伴って使われる一定の傾向が見られる」, と述べている<sup>38</sup>。また, 不活性行為項を含む二価動詞に発達した \*Ha 系列パラダイムが3人称だけでなく1, 2人称も持つ完全パラダイムを獲得する一方, このパラダイムが本来不活性行為項に関係する文構造から発達したことに関連して, これはやがて不活性的意味合いの一価動詞活用, つまり自動詞活用にも転用されていった, というのである。そして, \*Ha 系列の一価動詞のパラダイムもまた, ヒッタイト語の -hi 自動詞活用に反映されている<sup>39</sup>。

さらに続いて, パーフェクトと中動(medium)との歴史的連関性について, ガムクレリゼ, イヴァノフの両著者は, 「印欧語に発生した一価動詞の -Ha 系列パラダイムは, 歴史的には不活性類名詞を反映する行為項がある場合に発生したものであるが, これは行為(ないしは状態)主体の特殊な状態を表す動詞構造の意義を伝達するものである。仮定されている印欧語動詞パラダイムのこの共通一般的意義から後の印欧語各諸方言に発生してきた可能性があるのが, 印欧語のパーフェクト形や中・受動形のような求心相的(centripetal)動詞構造である。古代の印欧語諸方言の資料から再構される, 印欧語パーフェクトの最古の機能は, その行為項に特徴的な状態(とりわけ心の状態)あるいは特性の表現であった。… \*Ha 系列の不活性動詞形の同パラダイムは, 1 人称 \*Hai, 2 人称 \*t<sup>[h]</sup>Hai, 3 人称 -ei 語尾をもつ最古の印欧語中動の基礎になっており, これの原初の意義は外向的の行為に対置される求心的な行為の表現であった。中動的動詞構造のこうした意義は, \*Ha 系列の動詞パラダイムの原初の不活性的意義から容易に導き出される」, としている<sup>40</sup>。例えば, 古スラヴ

語(>古代ロシア語)に残る無テーマ動詞 (athematic verb) вѣдѣти「知っている」の活用  
 1 人称単数 вѣмь < \* $\text{uoid-mi}$  の別形 вѣдѣ < \* $\text{uoid-a-i}$  < \* $\text{uoid-H}_2\text{e-i}$  は、ギリシャ語 perfectiva  
 tantum である 1・単  $\text{o}\dot{\iota}\delta\alpha$  < \* $\text{uoid-H}_2\text{e}$  (2・単  $\text{o}\dot{\iota}\sigma\theta\alpha$  < \* $\text{uoid-tH}_2\text{e}$ , 3・単  $\text{o}\dot{\iota}\delta\epsilon$  < \* $\text{uoid-e}$ )  
 に起源を持つ古い中動の残滓と考えられる<sup>41</sup>。

### [統語法]

さて、以上の状況から判るように、印欧語前史には全体として文法性に対する語彙性の  
 優位という状況が想定されるのであり、それは当然古い印欧語の文構造組織に反映された  
 はずである。ステパーノフは、同様の印欧語認識に立って、「印欧祖語のある段階に弁別さ  
 れていた」文型は、「少なくとも以下の三文型」が想定される、としている(以下では、仮  
 に活性類>活格=[か<sup>s</sup>]のように和訳)<sup>42</sup>。

#### I 型 不活性主体(物)+不活格動詞

(不活性主体指標 ゼロ [Ø] あるいは -o 語幹名詞で [-m])

「雪・溶けている」, 「岩(石)・横たわっている, 突っ立っている」

«Снег тает», «Камень лежит», торчит»

#### II 型 活性主体(人あるいは人に準ずるもの)+活格動詞

(活性主体指標 [-s])

「人 [か<sup>s</sup>]・歩行する」, 「熊 [か<sup>s</sup>]・寝ている(横たわっている)」

«Человек идет», «Медведь лежит»

#### III 型 活性主体+活格動詞+不活性客体

(活性主体指標 [-s]; 不活性客体指標 [Ø] あるいは -o 語幹名詞で [-m])

「人 [か<sup>s</sup>]・置く・石」, 「熊 [か<sup>s</sup>]・置く・石」

«Человек кладет камень», «Медведь кладет камень»

またステパーノフは、発達した主格・対格構造の言語に想定される理論的に可能な文型  
 は、以上の型の他、以下のようにさらにアスタリスクを付した三型を含むが(\*が増すほ  
 ど出現可能性の程度は減退する)、この内 I 型から IV 型までを印欧祖語基本四文型(major  
 sentence types)と呼び、これら文型(structural scheme, model)とそこに当て嵌まる名詞と動  
 詞の語彙類(lexical entries)の呼応関係を検証している<sup>43</sup>。

I 型 不活性主体+動詞

II 型 活性主体+動詞

III 型 活性主体+動詞+不活性客体

\* IV 型 活性主体+動詞+活性客体

\*\* V 型 不活性主体+動詞+不活性客体

\*\*\* VI 型 不活性主体+動詞+活性客体

ところで、原初的には IV 型は I 型～III 型に比して、当然出現可能性の程度は低いが、IV  
 型に現れる活性客体は、III 型の不活性客体>不活格(>対格)と異なって、上述のいわゆる  
 構造・統語的不活性>不活格(>対格)に発達していくものであって、ここに初めて文法性

が語彙性(意味性)を超える契機が始まる, 別言すれば, 格形式の発達が始まると思われる。格形式が萌芽して来る以前は, 形態に依拠せず名詞, 動詞の語彙類の並列(parataxis)によって語の意味性の力, 価値性だけで, すなわち主体, 客体に立ち得る語彙類としての潜在的地位に従って, 主体・客体関係の表出が支えられたのである。上に述べた無形態の典型たるゼロ語尾(不定格 casus indefinitus)が一定の統語的地位を潜在的に内包しているのは, 正にその語彙類が持つ意味性の高さによるものである。

なお, ステパーノフはⅢ型とⅣ型の生成過程に関してガムクレリゼ等とは異なる見解を持っている。結論的にいえば, ステパーノフの主張は, Ⅲ型, Ⅳ型文はそれぞれⅠ型文, Ⅱ型文を基礎として生成された, というものである。すなわち, 上でガムクレリゼ等は, Ⅲ型(A - V - In)の動詞構造は活性行為項と不活性行為項の標識を組み込んだ結果である, としたが, これは別言すれば, Ⅲ型文は perfectiva tantum 類を述語とするⅠ型文(In - V-e)を基礎としてそこに活性(活格)指標を加えたものということになる。ステパーノフはこうしたⅢ型の生成過程を「文内部からの発展ルート」と呼び, 仮に Камень лежит 「石(不活格)・横たわっている」→Человеком камень лежит 「人が=人によって(活格)・石・横たわっている」→Человек кладет камень 「人が・石・置く」のような過程として表している。しかし彼は第二のルートたる「文外部からのルート」=「連続ルート серийный путь (serial way)」, すなわち [Ⅱ型 + Ⅰ型] の二つの単文の交差ルートの可能性も指摘している。仮にこの過程は, Человек кладет 「人が・(横たえて)置く」+ Камень лежит 「石・横たわっている」→Человек кладет камень 「人が・(横たえて)置く・石」のように表される。リトアニア語における, 同一語根の母音交替による能動・使役相動詞と非他動・非能動・中動相動詞ペアの生成システムがその例であるという: Bėrnas mērkia 「若者が・濡らす」+ Linaĩ mīrksta 「亜麻が・濡れている」→ Bėrnas mērkia linūs 「若者が・濡らす・亜麻を」(cf. mērk-ti > mērk-ia; mīrk-ti > mīrk-sta)<sup>44</sup>。活格構造では直接補語対格は未分化であっても「近い補語」として常に活格動詞述語と一体的である潜在的な補語(抱合される場合もある)の存在は歴然としており, 敢えて第二ルートを仮説する必要性はあるのか, とする疑念は残る<sup>45</sup>。

またⅣ型文(A - V - A<sup>in</sup>)に関して, ステパーノフはガムクレリゼ等の「構造・統語的不活性」(「位置的不活性」)を認めない。主格・対格構造段階の印欧語なら可能でも, 「ウーレンベク期<sup>46</sup>では \*m 指標は Patiens にだけ, すなわちⅠ型文の主体とⅢ型文の客体の位置の不活性類名詞にだけ関係するもの」であり, ましていわんやウーレンベク期(活格構造崩壊期)より更に早い時期のガムクレリゼ, イヴァノフ期(活格構造期)<sup>47</sup>にこのような位置をしめる活性類名詞はあり得ない, と主張している。現実にⅣ型文(例「人が・殺す・敵を」Человек убивает врага)の「敵」のような行為項に直接結びつくような印欧語形は見出せないばかりか, 印欧語外の現存活格諸言語でもこうした現象の対応形式は存在しないという<sup>48</sup>。ではⅣ型文の意味機能を果たした文は如何なるものであったか? それはやはりⅢ型文における上述の第一ルート(「文内部からの発展ルート」=ガムクレリゼ, イヴァノフ再構ルート)的な生成と同じであり, むしろこれはⅢ型文以上にⅣ型文の生成

ルートであって、このルートの痕跡は実際に印欧諸語に追跡できるという。すなわち、Ⅱ型文「敵が・死ぬ」*враг умирает* → (人が=人によって・敵が・死ぬ) *Человеком враг умирает* → Ⅳ型文「人が・殺す・敵を」*Человек убивает врага* のようなルートである。そしてこのような発展過程の痕跡と見なせるのが、いわゆる「補充法的受動」(супплетивный пассив)であり、これがギリシャ語等に残っているのだという。例えば、「騎士等が・殺した・彼等を」の受動文は「彼等が・殺された・騎士らによって」とするのではなく、*κτείνω*「殺す」の受動形ではなく(受動形は存在するが)、(*ἀπο*)*θνήσκω*「死ぬ」(能動形)を用いて表したのである:

*αὐτοὶ γε ἀπέθνήσκον* (死んだ [impf/3/pl]) *ὑπὸ ἰππέων* (騎士等によって)「彼等自身がそこで騎士らによって死んだ」

*ἐπὶ ἄν πολλοὶ ὑφ' Ἑκτορος ἀνδροφόνοιο* (殺人者のヘクトールによって) *θνήσκόντες* (死んで [pres.part./m/pl/nom]) *πίπτουσιν* (滅びるであろう [fut/3/pl])「大勢の者達が殺人者ヘクトールによって死滅するとき」<sup>49</sup>。

ところで、上述のように、活性類(植物、動物、人間あるいはそれ全体、すなわち活性的、自立的因子、生命環を有するもの全て)と行為動詞(活格動詞)との、また不活性類(物、物体あるいはそれ様のもの)と状態動詞(不活格動詞)との連係呼応の関係は次第に崩壊の兆しを示して来る。ステパーノフが研究対象とした印欧語の段階(ウーレンベク期)では、必ずしも不活性類-不活格動詞、活性類-活格動詞が完全呼応ではない。ステパーノフによれば、Ⅰ型の述語は不活性類名詞(物体)の状態を表す状態動詞、いわゆる *perfectiva tantum* 類が呼応し(*πέπηγε*「突っ立っている」等)、またⅡ型の場合は活性類名詞に活格動詞、すなわち *activa tantum* 類が呼応する(サ *jigāti*「歩行する」、*βαίνω*, *βάσκω*「歩行する」等)のが原則であるが、ホメーロスの言語またギリシャ語外でも *perfectiva tantum* 類は「物の状態」(下図のa類)だけではなく、極めて人間的因子である人の「心の状態」を表す語彙素(下図のb類)を拡張し始めており、したがってⅡ型中動の語彙素と同義的な分野が生じている(cf.「喜ぶ、上機嫌である」ギ *γέγηθα*, ラ *gaudeo*, *gāvisus sum*;「恐れる、心配する」ギ *δεΐδια*)。なぜなら、Ⅱ型で「主体として際立たされ得るのは、人間の『活性的本質』であり、正に人間だけであるから、そこで述語として登場するのは恐らく専ら *media tantum* 類の動詞ということになる」<sup>50</sup>。一方、活格言語の状態動詞はもともと「不活性類の指示物に相関する物理的状态」の動詞であり、したがって本来1, 2人称を含む完全パラダイムを欠いた述語類である(*perfectiva tantum* 類について、ガムクレリゼ等は純動詞形ではなく動詞的形容詞を想定しているが、ステパーノフ、ペレリムートル等はむしろロシア語の状況詞 категория *сосостояние* に似た無人称述語類を想定する)<sup>51</sup>。そこに1, 2人称の要素を組み込む形で動詞を構造化して来たのは、正に人間、人格の介在が生じたからに他ならない。これら共通語義の分野は、前述の正に不随意行為・状態動詞に遡る分野に相当しようが、活性・不活性原理とは異質の人間主体(人格)の原理が介在することによって言語の主格構造化が進行し、その結果としてⅠ型文とⅡ型文の述語は「交差 *перифраза*, *periphrasis*」<sup>52</sup>し始め、他動性・非他動性の対立が前面に出てくるときに、こ



れら語義の述語類の配属先（他動詞か自動詞か）を巡って揺れが生じたもの，と思われる。したがって，印欧語のいわゆる能相欠如動詞（deponent verb）は，古い動詞体系の状態動詞の，新しい体系への不完全な組み込み，再編の結果であると考えられる（ステパーノフは「デポネントの楔 *депонентный клин*」と呼んでいる）<sup>53</sup>。

I 型述語（不活格述語）

II 型述語（活格述語）

---

perfectiva tantum (a)    perfectiva tantum (b)    media tantum    activa tantum

---

「人    間」    主    体

上図のような名詞類と動詞類のズレの原因に関して，印欧語の活格構造から主格・対格構造への再編過程では，分類の基軸すなわち「支配的分類」が名詞の分野から動詞の分野へとシフトして行ったとするガムクレリゼ，イヴァノフの説明が有効である：「活格型の言語は，主体・客体関係の伝達にではなく，文の活性行為項と不活性行為項の関係の伝達に照準を合せたものである。活格型言語の意味的支配因子（semantic dominant）は活性－不活性という名詞の二項分類であり，本質的にはそれが言語の構造全体を－曲用組織も活用組織も－決定づけるのである。動詞の形態的かつ統語的潜在能力は，指定された名詞の二項分類如何に拠るのである。名詞二項分類が活格型言語の深層構造の基にあり，それがその表層構造に現れる，言語の構造特徴の集合全体を決定しているのである。…印欧祖語の深層構造の再編は，支配的分類が名詞の分野から動詞の分野へ移行していった点に現れているが，動詞は，他動性－自動性という二項原理による区別を始めるのであり，この原理が言語の表層構造にある多数の諸特徴を包含する規定的分類原理となるのである。内容的対立は，名詞類から動詞類へ移っていくのである。言語の深層構造の，名詞対立から動詞対立へのシフトは，恐らく，より具体的な名詞対立からより抽象的な動詞対立への，また具体的指示対象の対立から行為タイプ，活動タイプの対立への，移行過程を反映したものである。動詞行為のタイプの対立（他動性－自動性）に直接結びつくのが，こうした過程に行為主体および客体として参与する一定の行為項を表す主体・客体関係の顕現である」<sup>54</sup>。

一方，ステパーノフは，上にいう名詞と動詞のズレつまり「不一致」について，活性－不活性原理による二項分類の整合性に干渉する「攪乱要因」の干渉について述べている。攪乱要因とは，「活動体性 *одушевленность*，人格性 *личность*」範疇の生成である。何故ならば，こうした不一致は，正に「人間，人格」主体とそれに対立する他の活性主体全体という形で起っているからであり，バルト・スラヴの資料－スラヴ語の名詞曲用における活動体範疇の生成とそれに並行する，バルト語における能動・使役動詞（active-causative）と非能動動詞（inactive）という二系列の動詞ディアテシスの生成（*Bėrnas mērkia linūs*「若者が・水に浸す・亜麻を」－*Linaĩ mīrksta*「亜麻が・水に浸っている」）は，恐らくこのことを裏付けることになる，としている<sup>55</sup>。本稿筆者は，ステパーノフの言う「攪乱要因」によって活性・不活性原理による名詞分類がポテンシャルを失い，代って新しい支配原理となる人間（人格）主体の因子（主体・客体原理）の組み込みが名詞ではなく動詞を主舞台として展

開して行った、そこで再編の核心は他動性と非他動性と対立の生成に向かい、この新しい動詞対立を軸として、当初は述語に単に並列 (parataxis) して述語に対する状況・限定的な説明関係を示すにすぎなかった不活格＝近い補語＞原初対格は次第に客対格一般から直接補語対格へと移行していった、と考えている。

### [印欧語の対格、補語、他動性]

印欧語の対格の起源は、上述からすれば、類別指標から文法格への発展であること、すなわち不活性類＞不活格＞対格のように辿ることができ、またそれらの形態指標として原初的な不定格 (無形態原基) からやがてそれを基にした \*m 格が発達したが、本来このマーカの意味は動詞句内でのあるいは限定結合句内での、動詞と名詞ないしは被 (限) 定語と名詞との相互連関性を指示する指標、別言すれば、状況的あるいは限定的な連関性一般の意味に遡ると思われる。ホメーロス (BC800) の対格に残滓している広い一般的連関性の意味は正にこの古層の原初対格の意味であろう。一般に「関係の対格」として記述されている対格の振る舞いがそれである。デスニツカヤは、論文「印欧語対格の文法範疇の発達史によせて－ホメーロスの『イーリアス』の言語における対格の機能」において、古代ギリシャ語における関係対格の広範な多様な現れ方を詳しく検証している<sup>56</sup>。「客体 (補語) 格と解釈する、まして直接客体 (直接補語) 格と認定する可能性は一切なく」、単に「動詞が表す行為を最も近接的に規定する概念を表す」ものであって、この対格の機能は、「行為の向けられる対象 (客体方向性) を表すのではなく、行為に状況説明を施すある根本的特徴を介して行為を特徴づけること」である。例えば、*γέγηθε*(pf) *δέ τε φρένα*(acc) *ποιμὴν* (Θ 559)「さて牧人は心(対格)嬉し(完了)」(デスニツカヤ p.90) のような動詞文、その同根形容詞 *γηθόσυνος κῆρ*(acc) (Σ 557)「心(対) 樂し」(デ 90)、また動詞 (*χόωμαι* = 怒る) の文 *Αἰνεῖς δ' ἄρα θυμὸν*(acc) *ἐχόσατο*(aor/3/sg) (Π 616)「そこでアエネイアースは心中(対) 怒った(アオリスト)」(デ 90) とそこから派生する中動分詞 (*χόωμενος*) の文 *Βῆ*(aorII/3/sg) *δὲ κατ' Οὐλύποιο καρήνων χόωμενος κῆρ*(acc) (Α 44)「オリュンポスの頂きより、心に(対) 怒りもて降り来たった(アオ II)」(デ 90) のように、何れの叙述語 (動詞、形容詞、分詞、中・受動) に対しても関係対格の振る舞いは同じである。その他デスニツカヤが挙げるいくつかの関係対格 (状況・限定対格) の例を拾っておこう：*πόδας*(acc) *ὡχὺς Ἀχιλλεύς*(Α 58)「足(対) 速きアキレウス」(デ 93)；*ἀλλὰ καὶ ὥς ὀλέεσθε*(f/2/sg) *κακὸν μόρον*(acc) (Φ 133)「だがともかく汝等は悪しき宿命によって(対) 滅びよう (未来) = 非業の死を遂げよう」(デ 91)；*Βλήτο* (PaorII/3/sg) *γὰρ ὦμον*(acc) *δοῦρι*(dat) (Ρ 598)「肩を(対) 槍で突かれた (受動アオ II)」(デ 96)；*καὶ νόον*(acc) *ἐν πρώτοισι Μυκηναίων ἐτέτυκτο*(P.ppf/3/sg) (Ο 643)「また思慮分別の点でも(対) ミュケーナイ人の中では第一人者に入っていた(受動過去完了)」(デ 97)；*τα τείρεα πάντα, τὰ*(acc) *τ' οὐρανὸς ἐστεφάνωται* (P.pf/3/sg) (Σ 485)「天空がそれによって(関係代名詞対格) 一面取り巻かれている[それを一面戴く](受動完了) 星兆全て = 天空を取り巻く [天空が戴く] 満天の星兆」(デ 97)。

この最後の例文の関係代名詞対格について、デスニツカヤは、これがやはり状況・限定

的対格にあることに変りはないが, 間接客体(補語)的なポテンシャルを顕しており, 近接的限定の格としての状況対格から, 直接ないしは近接補語格への, また間接補語格への連続線が延びている, としている。状況・限定対格から客体対格へのこうした過渡的な対格の振る舞いこそホメーロスのギリシャ語の特徴であり, 例えば無前置詞のいわゆる「方向の対格」も直近的限定の対格の一種に過ぎないが, 直接客体(補語)対格への過渡も示すものである: ἀλλὰ τόδ' αἶνον ἄχος κρᾶδίνην(acc) καὶ θυμὸν(acc) ικάνει(pres/3/sg) (Θ 147)「だがその故に烈しい悲痛が胸(対)や心(対)に及び来るのだ=胸や心を襲う」(デ103)。

二重対格, 三重対格の構文には, 状況・限定対格から直接補語対格に至る連なり全体が映し出されている:

[二重対格] τῷ(dat) δὲ καὶ Αὐτομέδων ὑπαγε(impf/3/sg) ζυγὸν(acc) ὠκέας ἵππους(acc) (Π 148)「彼のためにアウトメドーンが俊足の馬等を(対)軛の下へ(対)引いて行った=軛に付けた」(デ105); τότε νῶϊ(acc) βίησατο(aor/3/sg) μισθὸν ἅπαντα(acc) Λαομέδων ἔκπαγλος (Φ 451-452)「そこで恐るべきラオメドーンは報酬全部にわたって(対)われ等二人を(対)無理強いした=われ等二人に全報酬を渡さなかった」(デ105); τὸν(acc) δ' οὐτι(acc) προσέφη(impf/3/sg) κορυθαίολος Ἑκτωρ(E 689)「兜煌かすヘクトールは彼に(対)何も(対)話し掛けなかった」(デ104)

[三重対格] ἐνταυθοὶ νῶν κεῖσο(imper/2/sg) μετ' ἰχθύσιν, οἱ σ'(acc) ὠτειλὴν(acc) αἶμ'(acc) ἀπολιχμήσονται(M.f/3/pl) ἀκηδέες (Φ 122-123)「さあここに魚達に混じって横になれ, 奴等はお構いなくお前の(対)傷口から(対)血を(対)なめ取るであろう」(デ108)

かつてポテブニャは, ロシア語史における二重対格を説明するために, verba sentiendi, cognoscendi, declarandi (感覚, 認識, 発話動詞)に結合する無前置詞対格の語法 (услыхать новость, узнать знакомого, сказать слово; cf. услышать про новость, узнать о знакомом, сказать о чем, про что) を例に引いて, 「二種の対象を同じように対格だけで表現して意識の中で全く区別しない時代が存在したという結論には蓋然性がある。これは感覚を使い始めたばかりで掴み取れない物に手を伸ばす子供の状態, あるいは目に見える事物の線描画に遠近画法を持たない人間の状態を想起させる」<sup>57</sup>, と書いたが, ホメーロスの二重対格や三重対格に典型的に現れているように, 「意識が, 対象を, 述語との関係性の程度に応じて一定の遠近法(perspective)を以て配置するのでなく同一平面上で捉えていた時代の証明」<sup>58</sup>である。これは, 述語に対する数個の状況説明的限定語を, 述語特徴にとっての重要度や近接度には全く配慮せずに, つまり状況限定語の機能的な差異についての意識, 自覚がないままに, 次々それらを述語に連系して行く古層の状態の残滓なのである。

勿論, ホメーロスの対格には τὸν(acc) δ' ἔκτανε(aorII/3/sg) Δάρδανος ἀνὴρ (B 701)「ダルダニアの男が彼を(対)殺した」(デ113); ἀτὰρ μιν(acc) νῶν γε ἅταξ ἀνδρῶν Ἀγαμέμνων ἠτίμησεν(aor/3/sg) (A 506-507)「しかし今男等の主アガメムノーンが彼を(対)侮辱した」(デ113); τὼ(d/nom) μὲν ταρβήσαντε(aor.part/d/nom) καὶ αἰδομένω(pres.part/d/nom) βασιλῆα(acc) στήτην(aorII/3/d) (A 331-332)「両人は(双数主格)領主を

（対）怖れ憚りつつ立っていた」（デ112）等々のような直接補語（客体）対格も大量に現れている。しかしそれでもなお、ホメーロスの対格は状況・限定的対格の極から直接客体（補語）対格の極までの全体を包括する単一組織であり、これらの極とその過渡の対格を統一せしめる意識の契機、主因子は、述語、限定語に表れる特徴と対格名詞の緊密な連関性だけである。

他動性範疇の成立の契機は、この状況的限定格としての対格の衰退と直接客体格としての対格の専用化に関連している。主体の行為を直接及ぼす対象（客体）という意識は、対象が行為を直接的に被るという事態の意識の現実化に繋がる、すなわち被動性、受動性の意識の発生に連動するのであり、純直接客体格としての対格の確立とその論理的反映である受動相の成立こそ、他動性//自動性範疇成立の鍵である。したがって、対格の機能が流動的である状況下では受動相の成立もなく、故に他動性範疇の成立もないことになる。メイエもすでに、「印欧語比較研究入門」において、印欧語動詞は本来他動詞でも自動詞でもなく、どちらの意義も許容する、と書いている<sup>99</sup>。長期にわたる具体的文脈での語用の抽象によって動詞が直接補語獲得能力を身に付け固定化させ、それに付随して発生する受動相範疇の確立こそ、他動性と自動性の対立の文法化の極であり、文法化の基準であるが、印欧語は他動性と自動性範疇の文法化に対して、今日に至るまで専用的な形態形成を獲得しておらず、語彙・意味性に依拠する傾向が強いのである。まして、上述の対格の振る舞いからして、ホメーロス期にとって他動性と自動性の分界域は流動的であり、他動性の性格自体が現代語の通念とは異なっており、したがって受動相は確立しておらず、それは状態を表す特殊な非他動形の一つにすぎない。デスニツカヤは、もう一つの重要論文「印欧語の他動性範疇」で古代ギリシャ語に大量に見られる他動・自動両用の二重用法を挙げながら（*κλίνω*「傾く、傾ける」、*φλέγω*「燃える、燃やす」、*λείπω*「（見え）なくなる、見捨てる」、*λῆγω*「止む、止める」等々）、次のように書いた：「我々が古代ギリシャ語に見ているのは、他動性と自動性の意義が未分化であった動詞の状態の全残滓組織である。この点で、動詞語基は中立的、絶対的であった。…第一次的な中立性は、他動性よりは自動性の方に近いものであった、と推定できる。この自動性は、我々の語義における『自動性』ではない。第一次的な『自動性』は、動詞語基のあらゆる語用タイプをも包括し、またそうであればこそ、動詞に付置して何れの補語も使用できるという、かなり広い概念であった。したがって、この自動性に『受動性』とか非行為性といった性格を当てはめても、それは極めて不正確なものになるであろう。このような意味ニュアンスは、確かに生じ得たであろうが、それは特別な文の意味に依ってのみ生じ得たのである。第一次的な自動性は、行為と一定の客体との共起性を排除するものではない；ただし、客体とのこの共起性の性格は、行為の、客体への指向性を前提とするような『他動性』ではない。これは、むしろ動詞語基の意味を様々な名詞語基の助けを借りて具体化することである」<sup>100</sup>。したがって、ここにいう『自動性』は、非他動性と言い換える方が適切であろう。デスニツカヤはこのことに念を入れている：「古代ギリシャ語に対して、動詞語基の第一次的な意義を『絶対的』ないしは『中立的』意義と定義することによって即、後世の範疇としての『他動性』

を排除することになる。この場合、消極的な意味での『非他動性』という概念は残すが、統語的に形式化された『他動性』に対置して観念するような歴史時代の同名範疇とは幾分異なった意味内容をそこに込めているのである。第一次的な『非他動性』はそこに『他動性』の発展に対するポテンシャルを内包していたが、それは、この非他動性が、原初的に状況・限定的役割を演じてきた様々な名詞語基の助けを借りて動詞語基が表す行為を限定し具体化する可能性を許容するものだったからである<sup>61</sup>。

デスニツカヤは、この第一次的な『非他動性』、『中立性』が次第に縮小され、衰退していく過程は古代ギリシャ語動詞に顕れており、非他動的な意義はより古層、他動的な意義は二次的形成、という非他動性から他動性という歴史的継承性を以下のように示している<sup>62</sup>。いわゆる第Ⅱアオリストは第Ⅰアオリスト(シグマア・オリスト)に比べてより古層の状態を反映していると思われ、例えば *δύω* 「沈める」の場合、第Ⅱアオリスト *ἔδυν* 「沈んだ」に対して、第Ⅰアオリスト *ἔδυσσά* 「沈めた」のように現れる。また現在形が *βαίνω* 「行く」のような非他動的意義の場合も、第Ⅱアオリスト *ἔβην* 「行った」に対して、第Ⅰアオリスト *ἔβησα* 「行かせた、連れて行った」のようになる。古代ギリシャ語文法が第Ⅱアオリスト受動形とする *-ην* 形についても、これが本来非他動的・絶対的意義を持ち(例 *φαίνω* 「現す」に対する *ἐφάνην* 「現れる」)、そのため受動相形成の基礎となったが、ホメーロスでは古い絶対的意義の方が優勢で、受動の意義が稀であり、また第Ⅰアオリスト受動形とされる *-θην* (例 *παιδεύω* 「教育する」に対する *ἐπαιδεύθην* 「教育された」)についても絶対的意義が本来だというのである。さらにまた、完了形においても同様、非他動的な意義を持つ第Ⅱ完了形は他動的意義を持つ第Ⅰ完了形および現在形に対立している: 例 [Iperf] *ἔλωλα* 「滅んでいる[状態]」、[pres] *ἔλλυμι* 「滅ぼす」、[Iperf] *ὁλώλεκα* 「滅ぼし(てしまった)[結果]」; [Iperf] *πέφηνα* 「現れている[状態]」、[pres] *φαίνω* 「現す、示す」、[Iperf] *πέφαγκα* 「現し(てしまった)[結果]」。こうしてパーフェクト(完了)形は、パーフェクト本来の意義(上述参照)である「状態」の意義を「結果」の意義に変換し、さらにそれをテンス体系の中に組み込んで行くという再解釈過程の中で他動詞化の可能性を得たが、テンス体系の中で結局自立性を失ってアオリストと一体化(すなわちアオリスト化)して行ったのである。以上から、デスニツカヤは、ギリシャ語動詞語基の意義の性格について、古来、現在基は行為の性格に従って無客体用法と客体用法という両用の可能性があって、無客体用法では行為に「状態」の性格が付与されたが、一方アオリストとパーフェクトのアスペクト基では、「状態」の意義が優勢であった、と総括している。

ホメーロスに見られる動詞の構造化は、結局は原初的な行為と状態の対立に基づくニュアンスを残滓し、他動性・自動性対立とは関りがなく、したがって受動相は存在し得ず、ましてそれ等のための形態形成、形式化、文法化はない。デスニツカヤは、次のような主旨を説明している: 古代ギリシャ語動詞の相組織は、行為の「中立的」と「主観的」ニュアンス(いわゆる active と medium)の上に組み立てられたもので、元々他動性、自動性の区別とは一切関係ない、そこで中動形の下でも対格の直接補語が立つことになる。なるほどこの相組織の分解過程の中で中動形(medium)はある程度絶対的、すなわち自動詞的意

義に専用化された。再帰代名詞を基にして発達した中動相もその語彙的組み立ての故に自動詞的意義を持っている。他動的使用が不可能であるというこの状況の発生が、中動形を諸処に発生してきた受動相の形として再解釈する前提の一つとなった、と<sup>63</sup>。それでは、ホメロス期に未だ不安定、流動的である受動相の成立はいつ頃なのか。これについても、デスニツカヤは、ギリシャ語史は徐々に受動相範疇が発達してきたことを示しており、ヘレニズム期 (BC330-30) すでに medium は枯渇しつつあり、アレクサンドロス期の文法家がすでに medium の意義を理解しておらず、それは *ἐνέργεια* (能動) でもなく *πάθος* (受動) でもない *μέσος* (中間) という呼称の仕方に現れている、と述べている<sup>64</sup>。

「相互対立を示す他動性と自動性は、歴史的カテゴリーであって、様々な言語の語彙・意味的組織及び文法組織におけるこのカテゴリーの意義、機能は、最初から与えられたもの、安定したものと見なすことはできない」のである<sup>65</sup>。

## 2. ロシア語史における対格, 補語, 他動性

ポテブニャが「ロシア語文法覚書」において、古代ロシア語に現れる *verba sentiendi*, *cognoscendi*, *declarandi* と共起する無前置詞対格について、古層に進むほど有前置詞形ではなく無前置詞対格の措定が目立つことを評して、遠近画法を知らない人類の幼年期とする主旨の発言を行ったことは、すでに上に述べた。ポテブニャがそこで挙げている多数の対格の例と彼自身がその対格に付した注釈 (括弧内等号付きの部分) と共にいくつか拾っておく (下線は対格): слышавъ же Ярославъ волхвы (=про волхов, что появились волхвы) приде Суздалю (Лавр. л.) 「ヤロスラフは占い師のことを聞いてスズダリにやって来た」; услышавше Псковичи князя великого въ Новгородѣ (=что он в Н.), и послаша пословъ (Пск. л.) 「プスコフの人々は大公がノヴゴロドにいと聞いて使者を遣わした」; Рюрикъ же, видѣ (въ) свое непогодье (=что не по году, что не вовремя, не в пору дело), отъиде в свои Вручии (Лавр. л.) 「リユーリクは時にあらずと知って自分のヴルチーへ去った」; Михаилъ же увѣдѣвъ приятъе киевское (=узнавши о взятии Киева) (Ип. л.) 「ミハイルはキエフの占領について知って」; Повѣдаша ему Володимера въ Черниговѣ а Изяслава у Стародубѣ (=что В. в Чернигове) (Ип. л.) 「(彼等は) ヴォロヂメルがチェルニゴフに, イジャスラフがスタロドゥブ近くにいることを彼に知らせた」<sup>66</sup>。

基本的で今や古典的な著書たるボルコフスキー、クズネツォフ「ロシア語歴史文法」も、このポテブニャを出発点としながら、「行為の客体を表すための無前置詞対格の使用は、古代ロシア語では現代ロシア語よりはるかに広範」に行われていた、と記述して、ポテブニャとイストリナとカルスキーの知覚、感覚、認識、発話動詞の例文を引用しながら有前置詞形の増大について書いているが、ボルコフスキー (統語編を担当) もそれ以上は言及していない<sup>67</sup>。こうした記述の流れを受けて、ゲオルギエヴァはその著「ロシア語の統語現象の歴史」において、プスラーエフを含むロシア語史家等がかねてより指摘してきたこととして、ロシア語史は、上のような知覚、感覚動詞等の典型も含めて、直接補語を間接補語に

置換することによって間接補語を漸次拡大する路線を取ってきたのであり、これは前置詞を介して文意をより厳密化して行く方向であり、いくつかの場合はその逆の傾向も排除しないが、その逆路線はロシア語史の主流とは認め難い、とする主旨の記述を行っている<sup>68</sup>。例えば、直接補語を取る次例：

Поча Олегъ воевати древляны (原初年代記)「オレーグはデレヴリャネに(対格)戦いを挑み(と戦い)始めた」

Что ради домъ мои оставихъ и кого ради путь сии горький шествую (キエフ・ペチェルスキー修道院聖者伝)「吾は何故家を捨て、誰(た)がためこの辛苦の道を(対格)行くや」

ではそれぞれ воевать с древлянами, шествовать путем [cf. завоевать древлян; держать путь] へと置換されて来ており、これが主流の傾向だということになる。一方、間接補語を取る次のような例：

Ополѣ Святославъ Козаромъ (与格) и градъ ихъ и Белу Вежу взя (原初年代記)「スヴァトスラフはハザールに打ち勝ち、彼らの町とベラ・ベジャを占領した」では、直接補語への置換が生ずるが(cf. одолеть Хазар「ハザールを打ち破る」), これは主流ではないというのである<sup>69</sup>。

しかし、ゲオルギエヴァは、ポテブニャの上の例文に関するコメントの「ここで唯一重要なのは、文献がアーカイックになれるほど、直接客体(補語)と間接客体(補語)の区別が回避されているという点だけだ」とする意味を考えていない、と思われる<sup>70</sup>。対格を有前置詞形によって置換していく傾向は、一方では勿論真実である。しかし、ゲオルギエヴァの、直接補語を間接補語に転換していく傾向が主流だというこの認識は、古代ロシア語における対格が直接客対格(直接補語格)であるという前提に立っている。果たしてそうであろうか。彼女が挙げる上例の対格は対格には違いないが、直接客体格とは認定し難いものである。こうした疑念に立てば、ロシア語史の対格の機能とその発展過程についても、印欧語史を考慮しながら広い視野から再検討する必要がある。すでに上述のように、印欧語の古層の対格は原初的には斜格一般形であって、直接補語格の機能も含めて述語の意味を補足し明確化する極めて広い一般的な意味での、述語に対する状況・限定格である。状況・限定格から客対格一般を経てさらに直接客対格(直接補語格)に至る広い機能範囲を包括する対格が、主格構造言語の基軸格としてすなわち直接客体格として確立し、それ以外の一般斜格の対格機能を、時と共に生成して行く他の諸斜格に配分して行く過程(時には有前置詞化しながら)を単純に、直接補語を削減して間接補語に転換して行く過程だ、と一般化することは、事態を正確に反映した認識とは認め難い。また、ロシア語史においては、直接補語に転換(上例では与格→対格)していく過程は「主流ではない」とするゲオルギエヴァの逆路線の指摘についても、印欧語史を背景とする広い視野に立って再検討する必要があると思われる。何故ならば、印欧語史においては、「直接補語格としての対格機能の専用化と精密化は、他の客対格(与格、属格等)を削って対格の展開範囲を拡張していくことを伴う。一連の印欧語史とりわけ最新期でのそれにとって、対格を客体格一般

に転ずる傾向が特徴的であり」, ロマンズ諸語, ラテン語, ゲルマン語またギリシャ語でもこの傾向が特徴的に見られるからである。古代から現代に至るまで文証されるギリシャ語史において, 「対格が他の客対格を駆逐して行く過程がかなり鮮明に追跡される。すでにコイナーにおいて, 多数の動詞下で対格が与格に取って代わり, それら動詞を他動詞化しており」, 例えば, *πολεμῆν* 「戦う」, *ἐνεδπεύειν* 「待ち伏せする」, *ἀπαντᾶν* 「出会う」は与格支配から対格支配への変換例だという (cf. 上のゲオルギエヴァの例 *воевати* 「戦う」+対格)。またその後のギリシャ語史では, 与格の所格的, 具格的機能は有前置詞語法に変わり, 一方間接客体の意義は属格と対格の間で揺れているという: *δός* (Iaor/imper/2/sg) *ἐλευθέρωσιν* (acc) *Εὐφροσύνης δούλης* (gen) 「女奴隷エウフロシュネーに(属格)自由を(対)与えよ」; *Οὐ μὴ γράψω σε* (acc) *ἐπιστολὴν* (acc) 「私は君に(対)手紙を(対)書かないだろう」<sup>71</sup>。今日の対格研究の到達点に立てば, ロシア語史においても, 基軸格たる主, 対格の対立, 直接補語と間接補語の対立, また他動性と自動性の対立を既成の事実として取り扱うことには問題がある。ゲオルギエヴァの記述は実態を正確に反映している, とは思われない。これらは, 既述のように, 歴史的範疇なのである。

先に述べたポポフ「統語研究」も, すでにスラヴも含めた印欧語における直接補語対格としての対格の未分化性, あるいは状況語や斜格一般の機能を担う原初対格(protoaccusative)の証明を行っている。また主, 対格の意義, 機能が交替してその差異が不明である, 両格の境界線上にあるような構文研究を行い, 原初対格の意義は従属対格でなく自立対格的であること, 自立対格から従属対格への発展路線を示した: 「自立対格はその用法が極めて多様である; このことは, 対格が最古の斜格であり, かつてはそれが『一般斜格』(クルチウス)であったという立場を裏付けるのである。また, 最大多様な用法を示すのが自立対格である以上, これは自立対格が従属対格以上に原古であることの証明となる」<sup>72</sup>。ポポフは, 互いに意味機能が境界線上にある次のような自立的主, 対格の例を挙げている: ①場所, 時間等の主, 対格, ②共同, 随伴的 (comitative, sociative) 意義の主, 対格, ③関係 (原因, 理由, 様態, 結果等) の主, 対格の例<sup>73</sup>

- ① リト *ryts-vakarēlis* (主格) 「朝な夕なに」, ロ *рука об руку* 「一緒に, 仲良く」, *час от часу* 「刻一刻と」, *точка в точку* 「一点の狂いもなく, 極めて正確に」等, 途切れず連続的な意義の主格重複に遡る構文, cf. 古口 *днь днь* 「毎日」, 古イ *kalyaṃ kalyaṃ* 「毎朝」等; ラ *stadium* (対格) *currere* 「1 スタディウム (対格) 走る」, *στάδιον* (対格) *ἰέναι* 「1 スタディオ (対格) 行く」, 古ロ *всю ночь* (対格) *пилъ бѣ с дружиною своею* 「一晩中自分の従士団と飲んでいた」
- ② ロ (フォークロア) *обертывался серым туром золотые рога* (主格) 「黄金の角 (をもった) 灰色の野牛に変身した」, 古イ *naras* (男) *mahābāhus* (大きな手・主格) 「大きな手 (を持つ) 男」; ラ *stabat eusem* (剣・対格) *in manu* 「手に剣を (もって) 立っていた」, ギ *πόλεμον* (戦い・対格) *ἐστράτευσαν* (行軍を行った, 進軍した・アオ・3・複) *τὸν* (その・対) *ἱερὸν* (聖なる・対) *καλούμενον* (呼ばれている・対) 「彼らはいわゆる聖戦を (もって) 進軍した」, ラ *nuntiam* (通知・対格) *ire* 「通知を (携えて, のため



に)行く」リト *gálvą* (頭・対格) *añt* (上に) *baĩno* (鞍) *nakčė* (夜に) *miegójau* (眠った・3・単)「彼は夜鞍に頭を(乗せて)眠った」

- ③ *ékēinos* (彼の者・主格) *de* (ところで・小辞) *ou dōσω* (私は与えません) *autō* (彼に) *oudein* (何も)「彼の者に関しては私は彼に何も与えません」, *Έλληνες* (ギリシャ人達) *ēisi* (3・複・be) *to gēnos* (起源・主格)「その出自についていえば彼らはギリシャ人です」; 古イ *nāma* (対格)「名前に関しては」, ギ *díkēn* (対格)「慣例上」, ギ *tēn phusin* (対格)「性質は」, ギ *kámnw* (病む) *tēn kephalēn* (頭・対格)「頭が(頭に関して)痛い」, ギ *ōllutai* (滅びる・3・単) *lyggrōn* (悲惨な・対格) *ōlethron* (破滅, 滅亡・対格)「彼は悲惨な滅び方をする」, ギ *ēlkos* (負傷, 傷・対格) *outāsai* (害する, 傷つける, 打つ・アオ・inf)「傷を叩き害する(打って傷を負わせる)」, ラ *me* (私・対格) *puditum est*「私は恥ずかしい」, 古ロ *препоясався (=себе)* (自分に・対格) *чресла своа* (自分の腰を・対格)「自分の腰を帯(で)締める」<sup>74</sup> (後二例は後の時期には与格に取って替えられる対格), 等々。

ポポフのこの観点は多くの点で現代のガムクレリゼ, イヴァノフの「印欧語と印欧人」(1984)やデスニツカヤによる印欧語の対格や他動性に関する研究に合致し,「一部は現代の印欧祖語活格類型論を凌ぐ」(クリシコ)ほどである。

クリシコは,「ロシア語歴史統語法, 補語と他動性」(1997)あるいは最も最近の集団的労作の歴史文法である「12-13世紀古代ロシア文法」(1995)の「動詞」中の一節「相の関係」において, このポポフの研究を発展的に継承しつつ, 古い印欧語からの通史としてスケールの大きなロシア語史として, 対格と補語と他動性の発展の問題を統一的に論じている。

クリシコは次のように述べる<sup>75</sup>:「この時期(12-13世紀)の古代ロシア語には, 直接補語(прямой объект)という文法範疇および動詞の統語的他動性(переходность, транзитивность)という文法範疇—その他動性とは直接補語対格に対する強支配(必須的かつ予測可能な支配)能力と解されるもの—は存在しなかった。これら両文法範疇は規則的な形態的具体化を受けず, 未だ萌芽的状态の中にあり, 客体と動詞の(物理的, 精神的ないしは情緒的)行為との関係が未分化な『客体一般(объект вообще)』および『客体性(объективность)』(ポテブニャ)という, あるいはまた動詞語彙素が, 統語レベルでは(弱)支配を受ける格形によって表されるか形式的には表現されず言外に暗示される客体(объект)に対して向けられた行為を表す, ことを前提とするような語彙・意味的他動性といった, もっと広い意味範疇の個別的な統語的実現として登場していたのである」。つまり, 早期の古代ロシア語には, 我々の本来の意味での他動性は存在せず, したがって直接補語(直接目的語)も存在しないのであり, 存在したのはもっと広義での緩やかな他動性, 客体性一般とそれを補う未分化な格との連係シンタグマである。他動性と自動性の対立が未分化であり, したがって, それに連係する直接補語範疇も確立していない, つまり主体格と客対格の対立の完成度が見えにくいのであるから, このことは主格(対格)構造の核心になる構造的特徴(包含事象 implication)が未完成だということを意味する。

クルイシコは、そのことを証する以下の諸事実を挙げている<sup>76</sup>。第一に、他動詞と自動詞の形式的分界が不明確である点であり、それは他動・自動両用の二重的動詞語彙素の存在に現れている (cf. ホメーロスの言語における他動・自動的二重用法)。例えば、次の二例の内前者は他動詞として、後者は自動詞として現れている (cf. ギリシャ語 *φαίνω* 「現す pres」, *ἐφάνην* 「現れる P. Paor」)。なお以下の二例以外に、гънати, остати, писати, прозябнути, съмясти の他動・自動二重用法も挙げられる)：

Она же... съгнѣвъмъ великѣмъ въпияше о ноуже старьця сего яко имьи сына моего и съкрывѣи въ пещерѣ, не рачить ми его явити. «Изведи ми, старьче, сына моего да си его вижю. И не тръплю бо живаа быти, аще не вижю его. Яви ми сына моего да не зълѣ оумьроу, се бо сама ся погоублю предъ дверьми пещеры сея, аще ми не покажеша его» (ウスペンスキー集成・フェオドーシー聖人伝) 「彼女は大いに怒って、この老師が無理やり吾が息子を連れ出して洞窟に隠し、私に彼を見せようとしなさいと云って号泣した。『老師様、彼に会えるように私のところへわが息子を連れて来てください。私が酷い死に方をしないように、私にわが息子を見せてください。私に彼を見せてくださらないならば、この洞窟の扉の前で自ら命果てます』」

Въ граде Дорогобоужи нѣкая жена раба соуши дѣлаше въ вежи повелѣниемъ госпожа своя въ днь Николи, и вънезапоу явиста ей святая страсотръпца претяща и глаголюща ей, «По что тако твориши въ днь святого Николи» (ウスペンスキー集成・奇跡物語) 「ニコラウスの日にはドロゴブジの町である奴僕の家の中で女主人の命令で働いていると、不意に彼女(の前)に二人の聖殉教者が現れ、彼女を説諭して『何ゆえ聖ニコラウスの日になんかことをしているのか』と言った」

第二は、客体動詞(объективный глагол)と他動詞(транзитивный глагол)の厳密な区別が欠如していること。そのことは次の諸点に現れる：①行為の、客体に対する直接的方向性を表す多数の動詞の自動詞的使用、②後に対格支配を失う動詞類で、意味的には客体の存在を前提とするような動詞での対格使用 (въоевати греки ; подражати апостола Петра ; налѣсти стѣноу ; правити църквъ 等、とりわけ *verba sentiendi*, *cognoscendi*, *decalandi* の対格補語)、③意味的他動詞の下での従属(支配)形式の可変性(変異性)、柔軟性。

- ① Людие же его видяще тако падѣша обращахоуть имъ сѣмо и овамо, онъ же лежааше, яко мрътвъ, не могъи двигнути ни усты и очима (ボリスとグレーブ物語) 「人々は彼がそんなふうになっているのを見て、あちこちへ彼に(造格)向き(彼の向き)を変えさせてみた(転じさせてみた)が、彼は口も目も動かさない死人のように横たわっていた」<sup>77</sup>

Аже насилуеть робѣ, а боудоуть на него послоуси, дати емоу гривна серебра (スモレンスク証書 1229 年) 「もし女奴隷に(与格)強姦を働く者があり、その者に対する証人達がいる場合は、その者は一グリヴナ銀を支払うべし」

- ② Помышляшеть же мучение и страсть святого мученика Никиты

и святого Вячеслава, подобно же сему бывшю оубиению, и како святѣи Варварѣ отъць свои убоица бысть(ボリスとグレーブ物語)「(ボリス)は、同じように殺された聖殉教者ニキータおよび聖ヴァチェスラフの苦痛と苦難(のこと)を(対格)、また聖ヴァルバラの殺人者がその父であったことを思い出していた」

И се видѣ многыя играюща прѣдъ нимъ : овы гоусльныя гласы испущающемъ, другтыя же оръганьныя гласы поющемъ, и инѣмъ замарьныя пискы гласящемъ (フェオドーシー聖人伝)「すると(フェオドーシーは)彼の前で多数の者が演奏しているのを見た。その時ある者はグースリの調べを奏で、またある者はオルガンを爪弾き、またある者はザマーラ(吹奏楽器)(対格)を奏でていた」

- ③ Благодаримъ богоу ... благодаримъ отца и сына и святоумоу доухоу (Устав студийский)「われ等は神に(与格)感謝し…父と子に(対格)感謝し, 聖霊に(与格)感謝しよう」

Томъ же лѣтъ выведе Всеволодъ, приславъ, своякъ свои из Новгорода Ярослава Володимириця : негодовахуть бо ему новгородьци, зане много творяху пакости волости Новгородьскеи「同年フセヴォロドは使者を遣わして自分の義理の兄弟たるヴラヂミルの子ヤロスラフをノヴゴロドから退けた。彼がノヴゴロドの国に多くの悪事を行ったので、ノヴゴロドの人々は彼に(与格)不満を抱いていたからである」..... И послаша новгородьци къ нему Мирошку посадника и Бориса Жирославиця, Микифора съцьскаго, прося сына, а Ярослава негодующе ; и възворотихася въ Новѣгородъ (ノヴゴロド年代記)「ノヴゴロドの人々は彼のもとに市長官ミロシカ, ジロスラフの子ボリス, 百人長ミキフォルを, 彼の息子を迎えに派遣した。彼等はヤロスラフに(対格)不満を抱いていたのである。そして彼等はノヴゴロドに帰った」

第三点として、意味的には明らかに他動詞であるのに、必ずしもその性質を統語面に具現化しない絶対的使用の動詞語彙素が稀ならず存在することも、他動詞の地位の不確定性を証するものである。

Будеть ли головникъ ихъ въ вѣрвь, то зане к нимъ прикладываетъ, того же дѣля имъ помагати головникоу (ロシア法典)「もし殺人者が彼らの共同体の中にいる場合、(彼が)彼等に(分担金を) 寄せている(差し入れている)限り, そのこと故に彼らは殺人者を援助すべし」<sup>78</sup>

И святѣи долготерпѣниемъ и любовию влѣкутъ брата и не отскачють ни скарѣ-дують, ни гнушають ся, но покрываютъ и заступають (Пролог 13世紀寺歴訓話集)「聖者は忍耐と愛によって兄弟を引きつけ、退けず蔑まず、厭わず包み庇うのである」

以上のような他動性の未分化性は、既述の印欧語と同様、対格補語自体の性格の問題に直接的に関っている。他動詞、自動詞の分界が振幅するということは、基本客体格としての対格が他の格との間で可変性を持つからであり、他動性・自動性の未分化性は対格の客体的意味そのものの未分化性、不安定性に関係しているのである。第一に、対格の意義、機能範囲が極めて広く、直接補語対格（従属対格）ばかりか、状況格的対格、非従属的対格（自立対格）が多様であることである。クルイシコによれば、状況格的な無前置詞対格は四基本種（空間対格、時間対格、数量対格、関係〔目的、原因を含む〕対格）であり、この内後二者はこの期すでに少数例に止まるが、空間、時間対格は「副詞化されないまま完全に生きて機能」していた<sup>79</sup>。

[(純) 数量対格]

И раздѣлишася надвое, половину ихъ иде к погребу, а половина ихъ иде по мосту (原初年代記)「(彼等は)二手に分かれ、彼等の内半分だけ率に向かい、またその半分は橋を進んだ」<sup>80</sup>

[数量対格 (長さ対格)]<sup>81</sup>

Камень бѣше исходя предъ црквию лакать семь десять (トロイツキー集成)「(長さ) 七十ロコチほど岩が教会の前に突き出ていた」

[[古典的] 関係対格 *accusativus relationis*]<sup>82</sup>

Рожны остры и ребра и вежди проножень бывъ (Великие минеи чети)「鋭利な釘で肋骨と眼を(複数対格)突き刺されていた (受動過去分詞)」- τὰς πλευρὰς (f/pl/acc) καὶ βλέφαρα (n/pl/acc) διαπείρεται (M-P. pres/3/sg)

Власы остриженъ бы (с) Платонъмъ (Выголексинский сборник)「毛髪を(複数対格)プラトンに剃ってもらった(受動過去分詞)」- τρίκας (f/pl/acc) ἐκείρατο (M.aor/3/sg)

Беспрестаньными язвами сътираемъ тѣло твое (Служебные минеи)「絶えず傷を負わせて汝の身体を(単数対格)責め苛まれている(受動現在分詞)」- συντριβόμενος (M-P. pres. part. /m/sg/nom) σῶμα (n/sg/acc) σου (sg/gen)

[関係対格 (原因理由, 目的対格)]<sup>83</sup>

Чѣто тако печалоуеши ся, или мѣниши яко аз отидохъ от васъ (フェオドーシー聖人伝)「何を(何故に)そんなに悲しんでいるのですか、もしかして私があなたの方の所から去ってしまったと思っているのですか」

Что приведе отрока сего семо(Пролог Лобковский 1262г.)「何のためにこの若者をここへ連れて来たのですか」

[関係対格 (винительный коммодальный)]<sup>84</sup>

Онъ же(больной)... иде къ святѣи Анастасии и прѣклонивъ колѣнѣ прѣдъ олтарь, моляшеся съ слъзами реки... недостойнъ есмь милости... начаста мя свѣрбѣти очи, и бридость та съгужаше ему, да тѣрти начя очи пѣрсты(シナイ聖僧伝)「彼の者(病人)は…聖アナスタシア教会へ赴いて、祭壇前に跪き涙ながらに祈り

を捧げて言った…『私は御慈愛に値するものではございませんが…私は眼が痒くなり出しました』。そしてそのひりひりする痛みが彼を苦しめ、眼を指で擦り始めた」

И рече Володимеръ, «Дивно и мя, дружино, оже лошадь жалуете, еуже то ореть» (ラヴレンチー写本原初年代記)「そこでヴラヂミルは言った:『従士団よ、お前達が、そやつ(スメルド)が(それを使って)耕している馬を惜しむとは私は不思議だ!』<sup>85</sup>

【空間対格 (場所対格)】

Святыи же поиде въ кораблицы и срътоша и оустье Смядины (ボリスとグレーブ物語)「聖人は舟に乗って進んでいたが、彼等はスミヤヂノ川の河口で彼に目見えた」

И поставиша другоую скоудьльницю на поли коньць чюдиньчевъ оулицы (ノヴゴロド年代記)「(人々は)チュヂンツェヴァ通りの端に(ある)空き地に別の共同墓地を作った」

Хошу бо, рече, копие приломити конецъ поля Половецкаго (イーゴリ軍記)「ボロヴェツの野の果てに槍を折らんとぞ思う、と(イーゴリは)言った」

А мои ти куряни свѣдоми къмети: подъ трубами повити, подъ шеломы възлелѣ яны, конецъ копия възкръмлени (イーゴリ軍記)「吾がクルスクの族(やから)は名だたる綺羅星, ラッパの下で襁褓(むつき)に包まれ, 兜の下で揺すぶり育まれ, 槍の穂先の上で喰らわせられたる者ぞ」<sup>86</sup>

【空間対格 (運動目標対格)】

Въшьдшемъ же намъ костяньтинъ градъ, прѣже идоша посълании (ウスベンスキー集成)「我等がコンスタンチノスの町へ入ると、先頭を使節の者達が進んでいました」<sup>87</sup>

Цесаря ли князя ли ва проглаголю, нъ паче чловѣка убо проста и сѣмѣрена съ мѣрение бо сътяжала еста, имъже высокая мѣста и жилища въселиста ся (ボリスとグレーブ物語)「私があなた方お二人を帝とお呼びしようが公とお呼びしようが、あなたがたお二人は普通の慎み深い人以上にはるかに慎み深さをお持ちです。それ故にこそあなた方お二人は高き御座所とお住まいへ参らせ給うことになりました」

【空間対格 (距離対格)】

И затворишася Корсуняне въ градъ, и ста Володимеръ об онъ полъ города в лимени дали града ст[r]ѣлище едино (原初年代記)「ケルソネスの人々が町に立てこもったので、ヴラヂミルは町の対岸の入江で、町から一射程の距離の所に布陣した」

【空間対格 (運動規模対格)】<sup>88</sup>

оусеченъ бывъ, и принять главоу своима руками, иде дѣвѣ версте (Пролог Лобковский XIII в.)「首を切られてから、首を自分の両手で支えて二露里(を)歩いた」

И оттуды ити моремъ до Гурмыза 4(четыри)мили (アフアナーシー・ニキーチ

ン三洋旅行記)「そしてホルムズまでは海上を4マイル(を)行かねばならない」

[時間対格 (時点对格)]

Прѣданъ имать быти сынъ чьловѣчъ въ руцѣ чьловѣкомъ и оубиють и, и третии днь въстанеть (オストロミール福音書)「人の子は人々の手に渡され、彼等は彼を殺すであろう、そして三日目に甦るであろう」<sup>89</sup>

И съдумавъше новгородьце, и показаша путь из Новагорода и, выгнаша и на Гюргевъ день, осень, Ярослав князя (ノヴゴロド年代記)「ノヴゴロドの人々は協議してヤロスラフ公をノヴゴロドから退け(ノヴゴロドからの退路を指し示し), 秋(に)ゲオルギオスの日に彼を追放した」

Прочее же съ трѣклятыи прииде съ множествомъ печенѣгъ, и Ярославъ, съвѣкоупивъ воя, изиде противу емоу на Лѣто и ста на мѣстѣ, идеже бѣ оубиенъ святыи Борисъ (ボリスとグレーブ物語)「ところがそのあとこの幾重にも呪われたる者が多数のペチェネギを引き連れて来た。そこでヤロスラフは軍を召集してアリタ川の畔で彼を迎え撃ち、聖ボリスが殺された場所に布陣した」<sup>90</sup>

[時間対格 (長さ対格)]<sup>91</sup>

Въ тои да положите мя тако въ пещерѣ, идеже постынья дни прѣбываахъ (フェオドーシー聖人伝)「斎戒日の間私が居住していたあの洞窟に私を置いてください」

[時間対格 (時序対格)]<sup>92</sup>

И се третии дни не почи крича болѣзнию (Сказание о чудесах Николая Мирликийского—Торжественник XII в.)「これで(数えて)三日目にして苦痛に声を上げ休まることがなかった(3日間…休めなかった)」

Сию же дѣщере авраамлю сущу, уже съвяза сотона се осьмое на десяте лѣто, не подобаше ли раздрѣшити ея отъ язъ сея въ днь суботыни (オストロミール福音書)「こうしてサタンが縛って18年目になる(18年間サタンが縛ってきた)このアブラハムの娘である者を, 安息日でもこの束縛から解いてやるべきではなかったか」

[時間対格 (時間差対格)]<sup>93</sup>

Еѣ королевина величества свѣиские полномочные и люди придуть после или пере(ж) срошново времени н(д)лю или двѣ или три(Вести-Куранты 1645 г.)「スウェーデンの王女陛下全権一行が期日の前後 2, 3週間内に到着しよう」

以上のような、他動詞と自動詞の分界域の不安定性と対格の客体機能の不確定性、柔軟性という事情は、対格補語の重ね合わせ(二重対格補語)が意味的統語的に当然のこととして頻出したことにも現れている:

Въси же съврѣстьнии отроци его роугающе ся емоу оукаряхоути и о таковѣмъ дѣлѣ и то же врагоу наоучающую я(フェオドーシ聖人伝)「同年齢の子供達は全て、彼を嘲りそのような仕事について彼を非難したが、敵たる悪魔が彼等に(対

格)そのことを(対格)唆す(彼等をしてそれを唆す)が故のことである」

О все́мь се́мь еже мѧ въпрашаеши не вѣдѣ ничьсо же (Торжественник 12 в.)「このこと全てについてあなたは私に(対格)それを(対格)訊ねているが(あなたが私に訊ねているそのことは全て)、私は何も知りません」

したがって、二重対格支配の動詞から再帰形を作る場合、その二重対格の一方の対格補語を再帰代名詞-сяに変換すると、もう一方の対格補語は保存されたままであるから、こうした環境の中では対格支配の再帰動詞が頻出する結果を招くことになった(учити кого что > учиться что; 対格支配再帰動詞の大部分は、空間踏破、学習動詞の類であるという)。以下は、対格支配再帰動詞の諸例：

Наоучи бра(т)ю величю б(ож)ию и запрети имъ хранити вся, яже наоучиша ся о(т) него (Пролог Лобковский 寺歴訓話集 1262 г.)「(彼は)兄弟に(対格)神の偉大さを(与格)教え、彼ら(兄弟)は彼の者よりそれらのことを(対格)教わったが、それら全てのことを彼ら(兄弟)が為すことを禁じた(彼の者より彼ら兄弟が教わった全てのことを為すことを禁じた)」

Тѣгда же Мѣстиславъ переброя ся Днѣпръ, прѣиде в 1000 вои на сторожи татарьскыя, и побѣди я (ノヴゴрод年代記)「それからムスチスラフはドネプル川(対格)の浅瀬を歩いて渡り、千人の軍勢でタタールの先遣隊を襲い、彼等を打ち破った」

こうして対格と他動性との連動性、一体性は必ずしも古語の特徴ではないが、このことは次の諸点によく現れている：①上例のような、再帰動詞化による統語構造の不変化(対格支配の非再帰動詞に ся を付加しても対格支配が維持される)、② reflexiva tantum (絶対再帰動詞)、つまり同義対応の非再帰形を持たない再帰動詞にも現れる対格補語、③二重対格補語を持つ能動動詞文からの受動変換でも現れる対格補語。例えば、

- ① [非再帰形] еже бо ти обѣщаль коньчаю(Успен. сбор.)「あなたにそれを(対格)約束したが、私はそれをやり終えます(あなたに約束したことはやり終えます)」

[再帰形] не сътворихъ, еже ся бяхъ обѣщаль святому(Торжественник XII в.)「私は聖者にそれを(対格)約束したが、それをやり遂げなかった(私は聖者に約束したことを為し得なかった)」

- ② неиздреченною оноу добротоу дивяще ся (Выголексинский сбор.)「(彼らは)その名状し難いほどの美しさに(対格)驚嘆して」— cf. τὸ ἄρρητον ἐκεῖνο κάλλος(n/sг/acc) ἀποθανύζοντες(Act.pres.part/m/pl/nom)

- ③ прѣведенъ бысть море (Усп. сбор.)「(彼は)海を(対格)移送された」  
<прѣвести и море「彼を(対) 海を(対)移送する」<sup>94</sup>

このように、動詞の再帰化も相(voice, залог)の転換も対格の使用を妨げるものでなく、

受動形の存在は動詞の対格支配力に直接関係するものではない。対格がいわば相対的に自立性を持っているのである。受動形が自動詞からも形成可能であること、対格支配動詞の多くが受動形を形成しないこと、受動分詞とされる形(-м-, -н-, -т-)が必ずしも受動の意味をもたないことは、受動相の形成がなお流動的であることを示している。さらにまた、対格や他動性の不安定性を示す事実として、動詞句の体言化(動名詞化, いわゆる *nomina actionis* の形成)に伴って対格から生格に転換される他動詞の原則 (cf. *читать книгу – чтение книги*) が, 古語では自動詞句でも現れるのである:

тѣло мое оустрѣмляеть ся на лѣгание мягкыя постеля (Выголек. сбор.)  
「私の肉体は柔らかき床に(生格)横たわること (*nomen actionis*) に急く(急いで横たわらんとす)」 – cf. (ギリシャ語原文は異なる) *τὸ σῶμα μου δὲ ἐπείγεται* (M.pres/3/sg 急く) *κυλινδεσθαι* (M.inf 転がる) *τῷ βορβόρῳ* (dat 泥) *καὶ πηλῷ* (dat 泥土) *τῆς ἀνδρομανίας* *καὶ τῆς ἀπαλῆς στρωμνῆς* (gen マット)<sup>95</sup>

一方, 古語では, 動名詞化後もなお動詞句での対格補語をそのまま残すような以下の例も知られているが, これは対格自身の意義, 機能が未分化で, 対格の機能が非従属的, 自立的あるいは一般斜格的な性格を特徴とする不安定性, 柔軟性を遺していたからである<sup>96</sup>。

Мы от рода рускаго, Карлы, Инегелдъ, ..., иже посланы от Олга, великого князя рускаго, и от всѣхъ, иже суть под рукою его, свѣтлых и великих князь, и его великих боярь, к вам, Лвови и Александрови и Костянтину, великим о Бозѣ самодержьцем, царемъ Греческим, на оудержание и на извещение от многих лѣт межи христианы и Роусью бывшую любовь ... (原初年代記) 「われ等はルシの一族カルル, イネゲルド, ...であり, そは, ルシの大公オレグおよび彼の配下にある全ての名立たるかつ偉大なる公等および彼の大貴族等より, 汝等のもとへ, 神の加護になる偉大なる専制君主にしてグレキの皇帝たるレオンおよびアレクサンドロスおよびコンスタンティノスのもとへ, 多年にわたりてキリスト教徒とルシの間に在りし友好を(対格)強化, 認証せん (*nomina actionis*) がため遣わされたる者なり」<sup>97</sup>

現代ロシア語の他動性の基準として, ①非再帰性, ②被動形形成能力, ③単一客体対格とのみの結合性, を採り, また一方, 直接客体(直接補語)対格の基準として, ①被動文主格への変換性, ②否定および動名詞 (*nomina actionis*) の下での生格への変換性, ③名詞形の代名詞形への変換性, を採るならば, 現代ロシア語におけるこれらの完成度は必ずしも完全ではない。何故ならば, 対格支配の再帰動詞(*бояться сестру*), 状況語的対格の生格変換(*не шел версты*), 状況語機能対格に変わる代名詞使用(*в течение пяти недель, которые мы трудились вместе*), 二重客体対格(*А что тебя спрашивал Ребров?*), 多数の他動詞における受動変換不能性(*знать, посмотреть*), 自動詞からの被動形形成(*отомщенный*), のような逸脱例が多数見られるからである。「直接客体対格と状況語的対格の間に, 過去には厳密な機能・意味的な区別がなく, 再帰性は統語的他動性を排除するものでなく, また受動性は必ずしも他動性と相関しない。上のような一般原理からの逸



脱は、本来的な他動性が未だ客体性から脱却せず、従属関係構造の個別種の分化程度が低かった時期の、印欧語主格構造史の初期段階の遺産なのである」(クリシコ)<sup>86</sup>。特にロシア語史における対格と他動性の発達史に関連して注目すべきは、生・対格の競合の根強さであるが、これらについては、稿を改めて論ずる機会をまちたい。

- 1 石田修一「マルクス主義とソヴィエト言語学」、大阪外大言語社会学会誌 *Ex Oriente*, Vol.9, 2003, p.261; 石田修一「ソヴィエト言語学史再考」,『ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究』(2002年 科研報告, 研究課題番号 12610544, 代表柳沢民雄), p.215-216; A. B. Десницкая, Сравнительное языкознание и история языков, Наука (Лен. отд.), 1984, стр. 39-40
- 2 ロシア語からの重訳 (クリモフ [拙訳]「新しい言語類型学. 活格構造言語とは何か」, 三省堂, 1999, p.221 より)。露訳版「Язык, Введение в изучение речи」は1934年に出ており, クリモフはこれを引用 (原本 "Language, An Introduction to the Study of Speech" は1921年)。泉井氏による邦訳初版1957年; ここに引用した重訳箇所は, エドワード・サビーア (泉井久之助訳)「言語. ことばの研究」, 紀伊国屋書店, 1964, p.121-122に相当する。
- 3 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, Индоевропейский язык и индоевропейцы, Изд. Тбилисского унив., 1984; Indo-European and the Indo-Europeans, translated by Joanna Nichols, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 1995; クリモフの代表的な著作「一般能格論概説」(1973),「活格構造言語の類型学」(1977),「内容類型学の原理」(1983),「ソ連邦における類型学研究 (20-40年代)」(1981)については英訳, 欧文訳を知らない。「活格構造言語の類型学」については, 拙訳「新しい言語類型学. 活格構造言語とは何か」(三省堂, 1999)が, また「ソ連邦における類型学研究 (20-40年代)」については, やはり拙訳がある (上記註(1)科研報告所収)。なお, ブルガリアのスラヴ学者イヴァン・ドブレフ著 (拙訳)「古代ブルガリア語文法. 語幹論」(大阪外大学術研究双書 1993)も, 印欧語を活格構造とする前提の上で記述されたものである。ただし, これはガムクレリゼ等の構想とは細部では異なっている。欧米においてクリモフ, ガムクレリゼ, イヴァノフ等が如何に受容されているかについては, 次のような著書も参考になろう: Brigitte Bauer, Archaic Syntax in Indo-European, Mouton de Gruyter, Berlin/New York, 2000; Winfred P. Lehmann, Theoretical Basis of Indo-European Linguistics, Routledge, 1993; またわが国で初めて内容類型学について論じた著書が, 山口巖「類型学序説. ロシア・ソヴェト言語研究の貢献」(京都大学学術出版会 1995)であることは言うまでもない。
- 4 石田修一訳編著「ロシア語の歴史」, 吾妻書房, 1996 (ヴィノクール [拙訳]「ロシア語, 歴史概説」+拙著「ロシア語歴史文法」)に所収
- 5 cf. クリモフ「新しい言語類型学. 活格構造言語とは何か」, 三省堂, p.14-15; なおドブレフは, \*m 接尾辞の要素について, 「中央, 中間, 中心を意味する非常に古い代名詞語根」で, 前置詞 \*me-t- (ギリ *μετά*, ゴート *mith*=独 *mit*) もこの要素に由来し, この前置詞は本来「行為遂行を助ける媒体, 中心であることを表した」ものであるように, この要素は, 当初は, 「純粋に中間的な職能を持ち, 造格・共同格的な形を構成した」ものだ, と説明している (§. 30)。また \*s の要素は指示代名詞 \*s-o- に起源を持つ活格語尾であり, 指示代名詞の絶対格語尾 \*t-o- (>ギリ主 *ὁ*, 対 *τόν*, 古イ主 *sas*, 対 *tam* のように斜格に *t* の要素が現れる, cf. 古ス *ta*) に対立する, としている (§. 33)。さらに, 純粹語基すなわちゼロ語尾は, 活格に対立する絶対格を表徴した, とする (§. 28)。以上は次による: ドブレフ (拙訳)「古代ブルガリア語文法」, 大阪外大学術研究双書, 1993。
- 6 クリシコは, 革命前の科学アカデミーのウヴァロフ賞の候補となったボボフの「統語研究」(1789-1881)について, その選考委員会の評者で当時 34 歳のモスクワ大学助教授であったフォルトゥナートフの不当, 不誠実な評価を批判している (ポテブニャやヤギチは高い評価を与えていた): ボボフの「労作は, 現在に至るまで, 国外は勿論国内でも多くの言語学者の視野の外におかれたままの状態である…が, ボボフの著書と最新の印欧語統語法の諸研究を比較してみると, 我等は驚きを以って…若き言語学者の研究が彼の老碩学の同時代人等の仕事と比べて比較にならないほ

ど現実性を帯びたものであることに気づくのである。新しい流行の潮流が危機にある現在の状況下で…この不当に忘失された研究に回帰することは、歴史的・科学的に意義があるというだけではない：ポポフ構想は20世紀末の言語学がそれを等閑にできないほど深くかつ重くそして先見性がある」と語っている。(B. B. Крысько, Исторический синтаксис русского языка, Объект и переходность, Индрик, 1997, стр. 21)。

- 7 B. B. Крысько 同著, стр. 23-24。
- 8 Крысько, 同著, стр. 24-25
- 9 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, Индоевропейский язык и индоевропейцы, Изд. Тбилис. университета, I, 1984, стр. 273
- 10 同上著, p.273,276
- 11 クリモフ (拙訳)「新しい言語類型学」, 三省堂, p.67
- 12 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, ..., стр. 274
- 13 クリモフ, 同著, p.174
- 14 クリモフ, 同著, p.142-143 他随所に。
- 15 クリモフ, 同著, p.172 (cf. マルクスの遺稿を基にエンゲルスが書いた「家族, 私有財産及び国家の起源」第4章「ギリシャの氏族」)
- 16 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, ..., стр. 276, 277
- 17 Ю. С. Степанов, Индоевропейское предложение, Наука, стр. 47-48
- 18 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, ..., стр. 269-270; 複数属格には \*ōm の語尾も再構される (ギリ *πεδ-ων*, 古イ *pad-ām* 等)。これは第一次単, 複数属格指標 \*om + 複数指標 \*s > \*ōm によると考えられている。これによって第一次的な形態素間のシンメトリーが崩れ, 単数 \*os, 複数 \*ōm の対立が発生。また単・属 \*os と活性類指標 \*os の区別のため代名詞起源の enclitic 要素を合成した \*osjo (古イ *vrkasya*, ギ *λύκοιο*) が現れている (同 p.268, 270)。
- 19 同著, p.277-279; 山口巖「類型学序説」, p.253
- 20 古代インド語文法にいう *tatpuruṣa* (限定合成語) の内, 名詞合成語 *karmadhāraya* (同格限定合成語) がこれに当たる: *rāja-putrā-* (王・息子)「王子」, cf. ギ *ιατρό-μαντις* (医者・占者)「医者にして占者」 < *ιατρός* + *μάντις*; cf. イヴァン・ドブレフ (拙訳)「古代ブルガリア語文法」, 大阪外大学術研究双書, 1993, p.180,242,280
- 21 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, ..., стр. 279-280; cf. イヴァン・ドブレフ (拙訳)「古代ブルガリア語文法」, 大阪外大学術研究双書, 1993, p.142-145
- 22 Ю. С. Степанов, Индоевропейское предложения, Наука, стр.162
- 23 В. Б. Крысько, Исторический синтаксис русского языка, Индрик, 1997, стр.158
- 24 А. В. Десницкая, Сравнительное языкознание и история языка, Наука, Ленинградское отделение, 1984, стр. 77-78 (論文「印欧諸語における対格の起源について」より。これは, 基本的には1947年の論文「印欧諸語における対格の起源によせて」を再録したもの); cf. 山口巖「類型学序説」, p.241-251
- 25 クリモフ (拙訳)「新しい言語類型学. 活格構造言語とは何か」, 三省堂, p.68, 69 他。現存活格言語において, 活格動詞と状態動詞の構成は概ね一致しているが, 活格言語の段階位相に応じて異同はある。具体的にいえば, 「立っている」, 「座っている」, 「横たわっている」等の状態動詞でも, それが活性類名詞と不活性類名詞に関係する場合に応じて, それぞれについて二重に有生動詞「立っている」, 無生動詞「立っている」として区別する段階も, 活格動詞に対する状態動詞一般の「立っている」として語彙化される段階も存在する。なお, 「中間」, 「中立」動詞という発想は, 現在時制では主格・対格構造で現れるのに対してアオリストでは能格・絶対格構造で現れるある種の能格言語を指して「混合類型」とか分離能格性 (split ergativity) を, あるいはまた主格言語のプリズムを通して「逆受身」構造を認識する態度に似ている。本稿筆者は, これらの認識の共通性はすべて弁証法の欠落である, と考えている。
- 26 クリモフ, 同訳書, p.71

- 27 クリモフ, 同訳書, p.78
- 28 クリモフ, 同訳書, p.51
- 29 Г. А. Климов, Принципы контенсивной типологии, Наука, 1983, стр. 120
- 30 Howard I. Aronson, Georgian, A Reading Grammar, corrected edition, Slavica Publishers, p.335
- 31 グルジア語は, アオリスト時制では能格構文を取るから, その場合は, 主体=能格, 客体=主格になることは勿論である。ただし, 記述文法が「主格」とする格は本来「絶対格」(<不活格)であり, 「主格」という名称は, 主格構造言語のプリズムを通して記述する故の誤解を生じ易い呼称である。Inversion は普通「倒置」と訳されているが, ここではアロンソンの文意に従って, 「逆転」とした (cf. H.I. Aronson, Georgian, ... p.333)。
- 32 cf. 角田大作「世界の言語と日本語」, 1991-, p.107-109 他
- 33 さらに古くは, 意味上の客体は対格(下線部)である: *Patrem mihi colendum est; τὸν Πατέρα ἐμοὶ τιμῆτόν ἐστιν.* (cf. Ю. С. Степанов, ... стр. 32-33)
- 34 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, ... стр. 275; 前註も参照
- 35 クリモフ「新しい言語類型学・活格構造言語とは何か」, 三省堂, p.175-176; インユンクティブとは, 加音 (augment) のないインパーフェクト (未完了過去) 及びアオリストのことで, 本来, それこそが印欧語の現在 (<第一次語尾 \*-mi, -si, -ti, -nti), 過去 (<第二次語尾 \*-m, -s, -t, -nt) 時制の形式の基にあった, と考えられている。「インユンクティブは, 印欧語の現在・アオリスト体系の第一次の基礎をなしている」(山口巖「類型学序説」, p.264)。サンスクリットやギリシャ語で, インパーフェクトやアオリストを作るとき, 語根前に加音がなされるのは周知の所であるが (現・1・単 *παιδεύ-ω* 「教育する」>未完・1・単 *ἐ-παίδευ-ο-ν*, アオ・1・単 *ἐ-παίδευ-σ-α* 等), 例えば, ドブレフは, ヴェーダの頌歌やホメロスの言語において, 音節の加音 *augmentum syllabicum* は義務的な現象ではなく, 未完・3・単 *á-bhar-at = ἐ-φερ-ε* (< *bher-, φέρ-ω* 「運ぶ」) のような加音形 (この *a* あるいは *ε*) と並行して, *bhárat, φέρε* の非加音形が見られることからすれば, 音節の加音は比較的新しい特徴だということができる, と述べている (ドブレフ「古代ブルガリア語文法」, 大阪外大学術出版, p.84)。なお, 大文字の *H* はいわゆる印欧祖語に仮定されるラリンガル (喉音 *laryngeal*) を表しており, ソシュール, クリヤーヴィチ, バンヴニスト以前はいわゆる *schwa indogermanicum* (*ə*) によって説明されてきた音韻に相当するもの (喉音については拙訳ドブレフ「古代ブルガリア語文法」§ 3 [p.27-36]; 山口巖「類型学序説」, p.237-238; 高津春繁「印欧語比較文法」, 岩波全書, p.122-133 等を参照)。
- 36 現存活格言語, 能格言語等では動詞構造中に行為項マーカーが露出している場合があるが, 動詞構造中に関数的に組み込まれる, 文中行為項の代表者を *exponent* と呼んでいる。例えば, *A (gens) - V (erb) - P (atiens)* の文において, 動詞の構造を *a-p-V* (あるいは *a-V-p* 等々) のように形式化すること。印欧語の動詞活用の人称語尾も, 本来は恐らくこうした性格の (ここに略号化した *a, p* のような), 主体人稱を代理する *exponent* と考えられる。なおこれに関連して言えば, 活格構文, 不活格構文等には, 形態面から見て動詞型, 混合型, 名詞型が見られるのであるが, 動詞型とは文の行為項 (*Aktant*) を指すダイクティックな接辞を関数的に動詞構造中に組み込み, 行為項を表す名詞自体は格形式が未発達なため無徴のまま表す場合; 格形式の発達が萌芽するが動詞構造中に行為項を指す接辞も組み込んで補強する必要がある場合が混合型; 格形式が発達したため, 動詞構造中に行為項接辞を組み込まずとも主・述関係が分明である場合が名詞型, である。
- 37 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, ... стр. 296-302; *In - V-е* 型モデルの述語 (原初パーフェクト) モデルとして, 論者は, *\*ak<sup>[h]</sup>men k<sup>[h]</sup>ei-e* 「石・横たわっている」, *\*neb<sup>[h]</sup>es leuk<sup>[h]</sup>-e* 「空・明るい」等を挙げている; なお, 上述の I 型, II 型モデルの構文では一価 (*monovalent*) 述語が, III 型以上では最低限二価述語が現れることになる。
- 38 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, ... стр. 299; *da*「取る」, *dai*「置く」, *pai*「与える」, *mema*「話す」, *nai*「転じる, 送る, 導く」は特に無生 (中性) 直接補語と結ぶ, という (cf. *dahhi, datti, dai; dāgeni, datteni, danzi* のように, 1・単から 3・複までの現在時制活用語尾は *-hi, -ti, -i; -geni, -teni, -anzi*)。なお, 「印欧アナトリア諸語概説」(大学書林, 1990, p.49-50) では, 古期ヒッタイト語は通

- 常の *-hi, -i* ではなく、*-he, -e* という古い形式を保存しているが、ここから、 $1 \cdot \text{単 } *h_2e + i > *hai > *he$ ,  $2 \cdot \text{単 } *th_2e + i > *tai > *te$ ,  $3 \cdot \text{単 } *e + i > *ei > *e$  のような語尾の先史が推定され、*-he, -te, -e > -hi, -ti, -i* に変化した要因は、*-mi* 活用 (*-mi, -ši, -ti*...) の現在形の末尾 *-i* からの形態的影響と考えられる、とする解説がなされている。
- 39 同著, p.300;  $1 \cdot \text{単 } arhi$  「着く」,  $2 \cdot \text{単 } arti$ ,  $3 \cdot \text{単 } ari$ ; cf. 大城光正, 吉田和彦著「印欧アナトリア諸語概説」(大学書林, 1990, p.49) は、*hi-* 活用について、「その動詞語尾の形式は印欧語の完了形の語尾に類似している。しかし、機能的には *mi-* 動詞との間に何ら差異は見られない。このような特徴を持つ *hi-* 動詞がはたして印欧祖語に遡るのか、何らかの動詞カテゴリーから二次的につくられたのかという問題について、十分に説得力のある答はまだ提出されていない」と述べている。
- 40 Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, ..., стр. 300–301
- 41 cf. ドブレフ, 同著, § 15; なお、活格言語は主体・客体原理に則らず他動性・自動性の対立を欠くため、そこに能動態 (voice)・受動態範疇は存在しないが、遠心相と求心相という独特の相 (diathesis) が機能している。遠心相とは「行為が活性行為項の圏内を越えて広がり行くこと」を、求心相とは「行為が行為項内に閉じこもること」を表す。「燃やす」と「燃える」、「かむ、刺す」と「ちくちくする」、「乾かす」と「乾く」、「連れて行く」と「行く」、「引きずる」と「這いずる」等の対立である (クリモフ, 同著, p.115–117 他)。これは印欧語の能動相と中動相に発展する基底になったと考えられる。
- 42 Ю. С. Степанов, Индоевропейское предложение, Наука, 1989, стр. 11–12 (ステパーノフによれば、印欧語の発達段階は、ガムクレリゼ・イヴァノフ期 (活格構造の段階、ただし能格現象の混在期)→いくつかの中間段階→ウーレンベク期 (活格構造の崩壊期、すなわちこの構造に特有の名詞と動詞の類別、形態特徴の崩壊期であり、バルト・スラヴ的、ギリシャ・アーリア的ディアテシス、アスペクト・テンス体系の萌芽期)→主格・対格構造段階、であり、ステパーノフが再構する段階は、ウーレンベク (ユーレンベク) 期である、としている。なお、註 25 に関連していえば、I, II 型例文中の *лежит (=lie)* に付される数字 1, 2 によって、これが不活格動詞、活格動詞双方にわたる語彙素であることを示している。ガムクレリゼ、イヴァノフは、印欧祖語にこうした重複動詞として「居る、ある」、「横たわる」、「立っている」、「座っている」の 4 種  $\times 2 = 8$  個を再構しているが、これはむしろ有生動詞と無生動詞とも呼ぶべきものであるから、活格構造言語の初期段階の残滓であると思われる (Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, ..., стр. 295)。クリモフも、活格言語の初期段階位相が、基準的な活性・不活性原理より、活格言語の前段階たる類別言語に近接する有生・無生原理の意味的決定子 (semantic determinant) に則ることを示している (拙訳「新しい言語類型学」, p.63–64, 137, 209, 221. 他随所に)。
- 43 Ю. С. Степанов, ..., стр. 10–68 (第 1 章 印欧語の基本文型): ここでのステパーノフの主張は概ね次の通りである。ある種の語彙がある統語的位置に立ち得ないというのは基本律であり、特に抽象的主体と具体的客体の結合は禁である。例えば、ラテン語の *Necessitas me subigit* 「必要性が私を仕向ける」) のような、抽象名詞を他動詞の主語とするような構文 (VI 型) は、歴史的には新しく、印欧諸語において主として文学のことばである; また、V 型の主格も (例 *Молния зажигает сарай*)、時には VI 方に近く (*Стрела ранит врага*)、歴史的にはかなり若い構文であり、この主格は本来具格に遡る文 (*Молнией зажигает сарай*) である; IV 型 (*Воин убивает врага*) は基本文型に入っているが、独特の制限がある、等、文型の差異も IV, V, VI 型の出現度も、結局は嵌め込み語彙 (lexical entries, лексические вхождения) 如何によって決定され、かつ説明される。名詞句階層については、オーストラリア諸語の研究でよく知られたシルヴァースティーン (M. Silverstein) の研究結果と同様、印欧語についても、本来主体の位置を占め得る語彙能力に応じて、人物 > 人間一般 > 動物 > 植物 > 物 > 抽象名詞、のようなヒエラルキーが存在して、古い印欧語ほど左の範囲に限られ、時と共に右側へ範囲を拡大させていく、これは活格構造から主格・対格構造への移行に対応したものと見なすことができる。
- 44 Ю. С. Степанов, ..., стр. 42–44; なお、ステパーノフの挙げる例文では *леж-ит* (横たわってい

- る・不完了体), клад-ет (横たえて置く・不完了体)を例語として使っているが, леж-а-тъ, леж-ит (横たわっている)に対する по-лож-и-тъ, по-лож-и-т (横たえて置く・完了体)の, 母音交替(Ablaut)によるペアが存在することは言うまでもない。
- 45 千種真一「印欧語における文構造と動格性」『東北大学文学部研究年報第 41 号』p. 130
- 46 註 42 参照
- 47 註 42 参照
- 48 Ю. С. Степанов,... стр. 44, 48; 現存活格言語での当該型文の態様については, クリモフ拙訳 (三省堂) p.96, 102, 255–256 を参照。
- 49 Ю. С. Степанов,... стр. 46–49; II 型文(彼等が死んだ)に活格名詞(騎士が=騎士によって)を加えた, ということになるが, ここで活格名詞に相当する部分は *ἵπιο*+ 属格で表されている。そこで, ステパーノフは補充法受動における Agens の表現として, 無前置詞与格(道具手段としても物)→ *ἵπιο*+ 与格→ *ἵπιο*+ 属格(人間, 有生等擬人化されたもの, 抽象概念)の歴史を辿り, 受動分詞文における Agens の表現としての属格が印欧語共通の古い起源を持つことを導き出している: リトニア語 *mano kurta*= 古代ベルシャ語 *manā krtani* [=мое сделано]→мною сделано「私がやった」の意, ロシア方言 У волков здесь идёно「狼がここを通った」< \*Волков здесь идёно (стр. 51–52)。なお, *ἀνδροφόνοιο* については, 註 18 参照。
- 50 Ю. С. Степанов,... стр. 18
- 51 Т. В. Гамкrellидзе, Вяч. Вс. Иванов,... стр. 297; И. А. Перельмутер, Общеиндоевропейский и греческий глагол, Наука, Лен. отд., стр. 37; Ю. С. Степанов,... стр. 29–30
- 52 Ю. С. Степанов,... стр. 38–42; I 型, II 型文の述語は, それぞれ最小限述語集合からいえば *perfectiva tantum* (物体の状態)と *activa tantum* として厳密に境界があるが, この集合を双方から広げていくと重なり合う(交差する)部分があって, 「心の状態」を表す *perfectiva tantum* 類と *media tantum* 類の「交差」がそれである。この交差し合う両者の意味域は人間を主体とする述語類の分野であって, 両述語類は概して「同義的」である: 例 *μαίνομαι* 「有頂天である, 熱中する, 魔に憑かれる」(*media tantum*)と *μέμολα* 「熱心に思う, 熱情に溢れている」(*perfectiva tantum*)では語根は同義的であるが, それぞれ別の述語類に属する (стр. 38)。
- 53 Ю. С. Степанов,... стр. 30; cf. 山口巖 “Concerning Diathesis and Related Categories” 1994 及び「活格言語類型の論理」1997 (山口巖教授停年記念論文集「ことばの構造とことばの論理」, 1998, p.514, 673)
- 54 Т. В. Гамкrellидзе, Вяч. Вс. Иванов,... стр. 312
- 55 Ю. С. Степанов,... стр. 18–19
- 56 А. В. Десницкая, Сравнительное языкознание и история языков, Наука, Лен. отд., стр. 81–124
- 57 А. А. Потебня, Из записок по русской грамматике, I-II, Учпедгиз, 1958, стр. 296
- 58 А. В. Десницкая,..., стр. 107
- 59 A. Meillet, Introduction a l'étude comparative des langues indo-européennes, Tome II, Librairie Hachette, p.197
- 60 А. В. Десницкая,... стр. 128–130 (この部分クリモフが引用。cf. 拙訳, 三省堂, p.17–18)
- 61 А. В. Десницкая,... стр. 132
- 62 А. В. Десницкая,... стр. 130–132; デスニツカヤがいう他動性範疇の欠如についての根拠については, 山口巖「類型学序説」, p.244–245 にも要領よくまとめられている。
- 63 А. В. Десницкая,... стр. 133
- 64 А. В. Десницкая,... стр. 84
- 65 А. В. Десницкая,... стр. 134; クリモフ (拙訳), 三省堂, p.73
- 66 А. А. Потебня,... стр. 296–297; cf. 勿論, ロムテフの労作にも例文多数 Т. П. Ломтев, Из истории синтаксиса русского языка, Учпедгиз, 1954, стр. 58; Т. П. Ломтев, Очерки по историческому синтаксису русского языка, Изд. Мос. ун., стр. 257–260.

- 67 В. И. Борковский, П. С. Кузнецов, Историческая грамматика русского языка, Наука, 1965, стр. 471–474; なお, 最後の例文タイプの場合, ステパーノフは, повѣдаша ему Володимера (быти) въ Черниговѣのように быти (=be) の省略形式と考えており, この対格は本来二文, 例えば Video (見る) fratrem (兄弟 acc)+Frater (nom) venit (来る)→ Video fratrem venire (inf)「私は兄弟が来るのを見る」のような共有構文 (apo koinou < ἀπὸ κοινού) の結果であり, いわゆる accusativus cum infinitivo 構文の起源をなすものと説明している (cf. nominativus cum infinitivo: Земля пахать < Мне есть [надобѣ] земля + Земля есть [надобѣ] пахати; Мне земля есть [надобѣ] + Есть [надобѣ] пахати (Ю. С. Степанов,... стр. 163–165)。また, ギリシャ語でも「考える, 言う」動詞の導く間接話文で対格 + 不定詞の文 ἐφην (impf/3/sg) τὸν ποιητὴν (acc) παιδεύσειν (f/inf) τοὺς νεανίᾱς 「(彼は) 詩人が若者達を教育するだろうと言った」があり, 「見る, 聞く, 知る, 告げる」等の動詞の場合, 対格 + 分詞の文が行われることは周知の所である。
- 68 В. Л. Гергиева, История синт. явлений рус. яз., 1968, стр. 65–66
- 69 異本では воевати на деревляны (複数対格間接補語); одолѣ козаровѣ, одолѣ козары (何れも複数対格直接補語)。前者に対してスレズネフスキーは воевать с кем の訳を与えている。リハチヨフ訳では, воевать против древлян (恐らく на の語釈を受けて против); одолел Хазар (Памятники лит. Др. Р., 1978, стр. 38–39; 78–79)
- 70 А. А. Потебня,... стр. 298
- 71 А. В. Десницкая,... стр. 136–138
- 72 Крысько, Ист. гр..., стр. 32
- 73 Крысько, Ист. гр ..., стр. 25–46
- 74 препоясався чресла своа の例文に関連していえば, デスニツカヤは同著 (p.101) に「イーリアス」における類似のギリシャ語例文 (中動形 + 対格) を挙げている。Ζώννυμι 「(他人の) 帯を, ベルトを締める」の中動形 ζώννυμαι 「自分の帯を締める」と共起する対格 ζώσατο (Maor/3/sg) δὲ ζώνην (f/sg/acc) [Ξ 181] (デ 101) は, 二重解釈を許容するケース (状況・限定的対格とも直接補語対格とも) としている (cf. А. И. Десницкая,... стр. 101)
- 75 Древнерусская грамматика XII-XIII вв., Наука, 1995, 465–466
- 76 Древнерусская грамматика,... стр. 466–467
- 77 スレズネフスキー辞典が引いている二異本では, обращають и (単数対格), обращають имъ となっている。後者の имъ は, 文字通りなら, 複数与格であろうが, 単数造格 имъ の異形と思われる。
- 78 スレズネフスキー辞典は, прикладывати=давать долю (分担金を出す) の解釈を与え, 当該文例を引用している。11–17 世紀古語辞典は, =прибавлять, присоединять (付け加える) とする語釈の項の中で当該文例を引用し, участвовать в складчине членов общины для уплаты штрафа в случае убийства (殺人の場合の罰金支払のための共同体成員の持ち寄り制度に加わる) としている。古語でも прикладывать 「添える, 付け足す, 上乘せる, 当てる」が語義の原点 (スレズネフスキー辞典) であって, 他動詞的であるはずだが, 補語 (上例訳「分担金」) は具現化されていない。
- 79 Древнерус. грамматика,... стр. 467–468
- 80 クリシコは, 純数量対格は専門書でもラヴレンチー年代記に現れる 3 例が指摘されるに過ぎず, その内 2 例はボテブニヤの指摘になるものだ, と述べている。ただし, この対格を無主体述語の主語だとするボテブニヤやカルスキー説には同意せず, これが対格起源の印欧語数量副詞 (cf. ラテン語 multum 等) と同源語法の名残であり, 現代語の特殊な文体の文 Снегу выпало (雪が大量に降った); Народу приехало (人が沢山来た) 型の構造式 (N<sub>2</sub>Vf<sub>3s</sub>) の文の起源を成すものだとしている。なお, ラジヴィル写本, モスクワ神学院写本では対格ではなくて половина (主格) になっている。あえて和訳すれば, 「半分(量)に限って, 半分については」となるだろうが, クリシコは, これを 80 年アカデミー文法の субъектный детерминант (主体的限定詞) であり, した

- がって自立(非従属)対格である, としている(В. Б. Крысько, Истор. синтаксис рус. яз., 1997, стр. 77–78; А. А. Потебня, Из записок..., III, стр. 349–350; Е. Ф. Карский, Труды по белорусскому и другим славянским языкам, Изд. АН СССР, 1962, стр. 54; Русская грамматика, II, стр. 150–151, 274–276)。
- 81 クレイシコは, 古代ロシアでは少数例しか文証されず, あまり確証的ではない, と断ってこの例を挙げている。古代ロシアは, こうした場合明らかに生格で現れる場合もあり(ископа ту печерьку малу в сажению 二сার্जेンの小さな洞穴を掘った), 数字表記法からして生, 対格の区別を確定し難いケースがある(створи ковчегъ в долготу локоть т長さ七ロコチの箱舟を作った)。ただし, 後世の東スラヴ語の長さ対格 пять верст длиной, тысячу шагов шириной 等やポーランド語やセルビア語での長さ対格の存在からして共通スラヴでの存在が推定できるとする(В. Б. Крысько, ..., стр. 82–83)。
- 82 東スラヴ語文献では二つの「古典的な」タイプの関係対格しかなく, 上例は第一タイプ—いわゆる「二重対格補語」支配の動詞の一方を受動変形した場合に起る, 受動分詞ないしは受動・再帰動詞下の対格補語であり, 全てギリシャ語に対応例がある模写訳(calque)であり, ギリシャ語も中・受動形が支配する対格補語である。第二タイプは独立文派生の非従属的な純関係対格であり, やはりギリシャ語原典(ゲオルギオス・ハマルトーロス年代記)からの翻訳一例のみという: кивоть завѣта г(с)ня созда, локоть к долготоу а ширьню локоть к и высоту локоть к — τὸ μῆλος... τὸ πλάτος... τὸ ὕψος; なお, 17–18 世紀に頻出する прочее「他のことに關しては」も第二タイプに属するという(Прочее ссылаюсь на цифирное письмо)(В. Б. Крысько, Ист. синтаксис..., стр. 102–104)。
- 83 ロシア古文献では, 原因理由, 目的の対格は疑問代名詞 что の形でしか現れないという(В. Б. Крысько, Ист. синтаксис..., 1997, стр. 105)。
- 84 「行為あるいは状態が向けられる」, 「行為あるいは状態の出現領域たる」対象(人物)を表す対格で, 古代ロシア語でも初期には生きていた関係対格であったが, 後にこれを与格(много бо ми болить душа)ないしは有前置詞格形(аще у кого болить зoubъ)に置換した。しかし共通スラヴ起源であるこの対格は, ウクライナ語やポーランド語には根強く残っている。ミクロシチはセルビア教会スラヴ語の多数の例を挙げている: дъщерь очи болѣху, болѣше половину головою 等(В. Б. Крысько, ..., стр. 107–108)。次の註参照。
- 85 シャフマトフに拠ってクレイシコが引用した例。当該部分(6611 年)はラヴレンチー写本(「ロシア年代記全集」第 1 巻 1926 年レニングラード)ия, Иパーチー写本

дивно

мя, Лазеви<sup>ル</sup>写本, 神学院写本 ми (与格)。リハチョフ, トヴォログフによる現代語との対訳本Памятники литер. Др. Руси, I, 1978, стр. 268; Библиотека литер. Древней Руси, I, 1997, стр. 268 «дивно ми»。クレイシコによれば, 古代ロシア文献ではこの機能の対格はすでに「散発的に」与格か有前置詞形に替えられ, 個々の東スラヴの分化時期頃にこの対格を残していたのはウクライナだけだという(cf. В. Б. Крысько, ..., стр. 108; А. А. Шахматов, Синтаксис русского языка, Учпедгиз, 1941, стр. 549)。
- 86 オブノルスキーも, イーグリ軍記における無前置詞生格, 与格, 対格を列挙する中で上の無前置詞対格二例を指摘しているが, その無前置詞語法の起源については説明していない(С. П. Обнорский, Очерки по истории русского литературного языка, Изд. АН СССР, 1946, стр. 165)。クレイシコは, イーグリ軍記のこの二つの無前置詞形 конецъ はそれぞれ на конце поля; на острие копья の意である, としている(В. Б. Крысько, ..., стр. 52)。
- 87 ギリシャ語原本は無前置詞形ではなく, ἐν Κωνσταντίνου πόλει (与格)となっている。このことは一層運動目標(方向)無前置詞対格の意義が 12–13 世紀ロシアに生きていたことを示している。また, この無前置詞対格は無前置詞与格や有前置詞対格(въ + 対格)とも競合していた。クレイシコは, パラタクシスの対格の, въ 対格による置換は先史時代に始まった可能性が高いが, その過程は, 第一段階として иде луку моря を背景とした, 動詞の接頭辞化 внида Черниговъ 有前置詞形 иде въ Киевъ の発展, 次いで第二段階として接頭辞と前置詞の呼応形式の発達

- внида въ Черниговъ, 第三段階として前置詞と派生関係をもたない動詞と有前置詞の組み合わせ構文 поиде въ Киевъ の成立のような過程を辿ったのではないかと推定している (В. Б. Крысько, ... стр. 55-58)。
- 88 数量対格 (長さ対格) や距離対格に近似するが, 長さ対格は動詞行為には全く従属しない長さを表すのに対して, 距離対格は対象の数量的特徴づけではなくある空間対象までの距離であり, 動詞行為に関する距離を表す。また運動規模対格は, 距離対格に近似するが, 運動時に通過した距離であるから一定程度運動行為の対象 (客体) である場合である (В. Б. Крысько, ... стр. 59, 62-65, 82)。
- 89 対応するギリシャ語は与格
- 90 прочее 以外に, 主として順序数形容詞中性形から派生する形が原点である (първое 初めて, 最初に, второе 二度目に, другое 二度目に, 等) が, 完全に語彙化, 副詞化したとは言いが切れない, 古期には生きていた時点対格の一種である。現代語 теперь < то първо もこの種の対格の名残である。Кулишコはこの種の対格を「列挙対格」винительный перечислительный と呼んでいる (В. Б. Крысько, ... стр. 69-70)
- 91 状況語的長さ対格というよりその対格を客体化 (直接補語化) する動詞がある: самъ же о(т)толѣ живяше в манастири томъ прочая дни своя проводя (フエオドーシー聖人伝)「それ以来自身は残りの日々(を)その修道院で過ごして暮らしていた」。否定生格に転換する古スラヴ語の例: тако ли не възможе единого часа побѣдити съ мною (マタイ 26-40)「あなた方はそんなにひと時も私と一緒に目を覚ましていることができなかったのか」(ギリシャ語は対格 *μὴν ὥραν*) も同様。早期のロシア語には, 否定, 受動転換でも動名詞化 (nomina actionis) においても直接補語の特徴を示さず状況語的に使用される場合があるが (попѣтесе... о недрѣманъи ношъ и днь 昼夜の不眠について気をつけなさい), 度々 [через + 対格] と競合を示す (чрѣсъ ношъ 等)。この種の構文の影響下で 19-20 世紀にかけて, 長さ対格の直接補語化過程が進行した (Хозяин! Что не спишь ты ночи ?; неспаные ночи ; за переезд десяти дней 等)。(В. Б. Крысько, ... стр. 71-72)
- 92 時間の長さ対格と異なり, 行為の占める時間全体ではなく, ある行為の経過時点で到来した差し当たつての期間 (очередной период) を表す。この対格は現代語にも残る (Мы ждали третий день ; Она выезжала первую зиму ; Пятый месяц от него нет вестей 等)。したがって, в третий год ; на третий год 等とは異なり, こうした有前置詞句への転換不能が時階対格の消滅の阻止要因という (転換すれば微妙な意味の差が区別できない)。В. Б. Крысько, ... стр. 72-73
- 93 「当該行為とある (先行ないしは目前の) 出来事を隔てる時間間隔を表す」対格で, 他の時間対格に比してはるかに遅く文献に現れる対格で, 早いものでも 17 世紀の例, 新しくは 18-19 世紀プーシキン, ゲルツェン, レフ・トルストイ等に現れているが (Три дня после того Лизавете Ивановне молоденткая, быстроглазная мамзель принесла записочку из модной лавки [Пушкин: Пиковая дама]), 現代語では原則として無前置詞形で現れることはない。ある行為に先行する時間を表すスラヴ最古の形式として, ギリシャ語原典 (*πρὸ ἐξ ἡμερῶν*) を反映した [прежде + 生格] があり (прѣждѣ шести дъни Пасхи приде Иисъ въ Вифанию [オストロミール福音書] 過越しの祭りの六日前に イエスはベタニヤへ行かれた), 14 世紀頃より [за + 対格] が見られる (въѣхалъ в Галичъ пред ним за три дни [原初年代記] その 3 日前に ガリチへ入った), 等々であるが, 古来この意では無前置詞形はなく, 近世, 近代における西欧諸語の影響が推定される (cf. C'etait cinq ans avant la guerre それは戦争の 5 年前 であった)。В. Б. Крысько, ... стр. 73-75
- 94 Древнерусская грамматика XII-XIII вв., 1995, стр. 469
- 95 Древнерусская. грамматика XII-XIII вв, стр. 470
- 96 В. Б. Крысько, Истор. гр. рус. языка, Индрик, 1997, стр. 34 (Кулишコは Vaillant および Капорулинаを参照しつつ, А. В. Попов の研究: 「古代へ向かうほど, 名詞, 形容詞下での対



格使用が増大していく」を引用して，当該例を挙げている）。引用の例文は，「原初年代記」6420 (912) 年に記された，グレキとルシの間の条約文冒頭の部分。

- 97 なお，この数行下には，名詞句（動名詞＋対格）ではなく，動詞句（不定詞＋対格）によって同じ文意を繰り返す一節が見られる：Наша свѣтлость болѣ инѣхъ хотяши еже о Бозѣ оудержати и извѣстити такоую любовь, бывшоую межи хрестьяны и Русью「われ等名代の者他の誰にも増して，キリスト教徒とルシの間に在りしかくの如き友好を（対格）神の御加護の下強化，認証すべく（不定詞）欲するものであつて」。

- 98 В. Б. Крысько,... стр. 12–13

(2004. 12. 25 受理)